

日本経済史研究の半生

石井寛治氏に聞く

石井寛治⁽¹⁾ (東京経済大学経営学部教授)

インタビュー 田崎公司⁽²⁾ (大阪商業大学経済学部助教授)

一 産業金融史から本格的蚕糸業史研究へ

院生から助手時代

田崎 本日はお忙しい中、東京から遥々おこしいただきまして、どうもありがとうございます。

きょうのインタビューの意図を簡単に説明させていただきます。

今回このインタビューを意図したのは、現在、日本経済史研究、大きく歴史学と言っていると思いますが、個別実証研究の進化は日々進展している一方、パラダイム転換によるグランドセオリーの喪失状況というものがありまして、深刻な混迷、混沌状況の中にあると評していると思います。

その不安からか歴史学研究会や日本史研究会では「戦後歴史学を問う」、「戦後歴史学再考」と題する大きな大会を開いています。先生が一九九九年五月の歴史学研究会専修大学大会で「戦後歴史学と世界史 基本法則論から世界システム論へ」を報告されたときは、あの八〇〇人収容

【人名注】

氏名(生没年)最終学歴/職歴。専門分野。主要著作。

- (1) 石井寛治(一九三八年、)
東京大学大学院/東京大学教授・東京経済大学教授。日本近現代経済史専攻。『日本蚕糸業史分析』(東京大学出版会、一九七二年)、『日本経済史』(一九七六年、(第2版)一九九一年)、『近代日本とイギリス資本』(東京大学出版会、一九八四年)、『体系日本の歴史12 開国と維新』(小学館、一九八九年)、『日本の産業革命』(朝日新聞社、一九九七年)、『近代日本金融史序説』(東京大学出版会、一九九九年)、『日本流通史』(有斐閣、二〇〇三年)。

できる大教室がぎっしり埋まって、立ち見も出るといような状況になったわけですね。

その一方で若い研究者、特に私と同じ世代の小田中直樹さん⁽³⁾などは『歴史学のアポリア』において歴史学に興味があるのかみたいな問いかけをする一方、戦後歴史学を担っていらつしやった永原慶二先生⁽⁴⁾が『二〇世紀日本の歴史学』、また大石嘉一郎先生⁽⁵⁾が『日本近代史への視座』と、今までの自分たちの研究の歴史をまとめ始めたのが、この何年間かの学界状況だと思えます。

一九八〇年から二〇〇〇年の二〇年間に遂に冷戦体制が崩壊するに至って、社会構成または時代区分についての従来の議論が根本から問い直され、一方では新しい視角としてのジェンダー、表象の歴史、または記憶の歴史、そういった問題が次々と歴史学に持ち込まれることになりました。それらによって歴史学・日本史研究・日本経済史研究そのものが劇的とも言える変化を遂げさせられている。そういった状況の中にあると言つていいと思えます。

そのような研究状況の中で膨大な先行研究を縦横無尽に咀嚼しつつ、旺盛な研究活動によって日本経済史の体系化を積極的に進められているのが石井寛治先生です。石井先生は処女作の『日本蚕糸業史分析』において製糸・蚕糸業の発展を分析することを通して戦前期日本資本主義の構造的特質を明らかにし、さらに『近代日本とイギリス資本』において、幕末維新期の外交への対応の特質について商人的対応という新しい提起をされました。その後、その研究は金融・商業・情報各分野に広がりを伴つものとなっております。

石井先生の着実な実証と綿密な論理というものは我々の世代に指導的な役割を果たされています。先生の業績は常に学会における研究の焦点となり、大きな影響力を与え続けております。我々後進の研究者にとつては、自分の研究がどこに位置しているのか、どこに向かえばいいのかを考えるとき、羅針盤の役割を果たしていると思えます。

そんなことで先生の今までの日本経済史研究の歩みについて忌憚なく、率直にいろいろお伺いできたらと思います。

(2) 田崎公司(一九五八年)

東京大学大学院/大阪商業大学助教授。日本近世現代政治経済史専攻。『明治維新の地域と民衆』(共著、吉川弘文館、一九九六年)、『関東大震災政府陸海軍関係史料 卷 陸軍関係史料』(編著、日本経済評論社、一九九七年)、『日本史料 4 近代』(共著、岩波書店、一九九七年)、『民衆運動史 4 近代移行期の民衆像』(共著、青木書店、二〇〇〇年)、『街道の日本史 12 会津諸街道と奥州道中』(編著、吉川弘文館、二〇〇二年)。

(3) 小田中直樹(一九六三年)

東京大学大学院/東京大学助手・東北大学助教授。フランス社会思想史専攻。『フランス近代社会 一八四一—一八五二』(木鐸社、一九九五年)、『歴史学のアポリア』(山川出版社、二〇〇二年)、『歴史学ってなんだ?』(PHP研究所、二〇〇四年)、『ライブ・経済学の歴史』(勁草書房、二〇〇四年)。

(4) 永原慶二(一九三二年—二〇〇四年)

東京大学/東京大学史料編纂所所員・一橋大学教授・和光大学教授・日本福祉大学教授。日本中世経済史専攻。『日本封建社会論』(東京大学出版会、一九五五年)、『日本中世社会構造の研究』(岩波書店、一九七三年)、『歴史家が語る 戦後史と私』(編著、吉川弘文館、一九九六年)、『二〇世紀日本の歴史学』(吉川弘文館、二〇〇三年)。

先生のご経歴からなんですけれども、一九三八年生まれということで戦時中疎開経験があると永原慶二他編『歴史家が語る 戦後史と私』の中でも若干そのことに触れてありましたけれども、そういった経験と歴史研究とのかかわり合いというのは先生の場合どうだったんでしょうか。

石井 はい、私は戦争が終わった年に小学校の二年生ということで、昭和一九年、一九四四年に小学校に入っています。戦争が終わったときは父親の実家のある香川県に縁故疎開をしてみました。そのときの経験は、幼かったので余りよくは覚えていませんけれども、ただ、決して楽しい生活じゃなかったということは言えますね。私、東京で育ちましたので田舎での生活というのは初めてで、食べるものが余りなくて、ちょっと栄養失調気味になりました。戦争が終わったというので、とにかく東京に帰れるなど嬉しく思いました。無蓋の貨物列車に乗って帰ったのを覚えていますが、幸い家は焼けてなかったもので、そこに住むことができましたけれども、父親が通信省に勤めていました関係で戦後失業したんですね。父が失業した戦後の生活というのは、非常に厳しい生活でした。幸い私の兄たちが何人もおりましたので、それが家を支えるということで、私も父親の手伝いで小さな町工場に行ったこともありましたが、アルバイトですね。

田崎 大学で経済学部を選んだというのは、やはり当時の戦後状況の中で経済学が持った位置づけというが意味づけが大きかったということと関係があるんでしょうか。

石井 そうですね、私どものころは東京大学の教養学部の文科一類に入学したんですけど、これは入るときには将来法学部に行くか経済学部に行くかは決まっていなかったんです。あんまり成績が悪いと法学部には行けないということがあるんですけども、どちらにも行ける人はいろいろ考えた末で選ぶんです。私はどちらでも行けるだけの成績はとっておきましたけれども、やっぱり自分の問題関心を生かしていくことができるのは経済学じゃないかなというふうに思って経済学部を選んだということですね。

田崎 当時の東大経済学部ですと労農派・宇野経済学、それから大塚史学、戦前からの講座派と

(5) 大石嘉一郎(一九二七年)

東京大学/福島大学助教授・東京大学教授・明治学院大学教授。日本近現代経済史専攻。『日本地方財行政史序説(御茶の水書房、一九六一年)』、『日本産業革命の研究』上下(編著、東京大学出版会、一九七五年)、『自由民権と大隈・松方財政』(東京大学出版会、一九八九年)、『近代日本の地方自治』(東京大学出版会、一九九〇年)、『日本資本主義の構造と展開』(東京大学出版会、一九九八年)、『日本資本主義史論』(東京大学出版会、一九九九年)、『日本近代史への視座』(東京大学出版会、二〇〇三年)。

いうそうそうたるメンバーというか、そういった教授陣をそろえているところだったわけですが、それでも、そういった中で明確にこういった学問をしてみよう、この先生についてみようというふうな考えはあったんでしょうか。

石井 経済学部に行ったときには三年生ですから、ゼミの選択があるんです。そのときは実は、どういふ分野でやるかはまだ考えてなくて、ゼミを選ぶときに随分迷いましたね。財政学とか金融論だとか、いろいろ有名なゼミがありましたけれども、どれも特定な分野に限られているところに、ちよつと私は不満があつて、いろんな分野のことをやるには経済史がいいんじゃないかというふうな考えました。

田崎 そのころ東大経済学部の中で日本経済史を担っていたのは労農派の土屋喬雄先生、山口和雄先生の一連の流れであつたわけですよ。社会科学研究所の方では宇野弘蔵先生、大内力先生、そういった方々が経済史、農業史を担っていらつしゃつたんですけれども、そういったものに対して明確に労農派・宇野経済学であるとか、または講座派であるとか、大塚史学であるとか、そういったことを意識されるということとはあつたんでしょうか。

石井 まだそういう研究をそれほど勉強していませんでしたから、当初はあまり考えてなかつたです。日本経済史では土屋喬雄先生という、いわゆる労農派の論客は、私が本郷に行ったときにはもうおられませんでした。そのかわりに山口和雄先生が北海道大学から来られました。それから前からおられる安藤良雄先生⁽⁶⁾がおられます、そのお二人の先生に習うことになりました。山口先生が労農派であるということは、私もちろん知っていました。安藤先生はちよつと中間的なんですよ。山口先生は土屋先生の後継者のような立場で、基本的には労農派の立場であるとしていましたけれども、だから山口ゼミに入ったわけではないんです。

田崎 山口先生ですと漁業史と金融史、産業金融というふうな研究分野になるわけですけども、先生が産業金融研究テーマに選ばれたのは山口先生の影響が強いのか、それとも自分の中で産業

(6) 土屋喬雄(一八九六年)一九八八年)

東京大学/東京大学教授・明治大学教授・駒沢大学教授。日本経済・経営史専攻。『封建社会崩壊過程の研究』(弘文堂出版、一九三〇年)、『日本資本主義論集』(育生社、一九三七年)、『封建社会の構造分析』(勁草書房、一九五〇年)、『洪沢栄一伝記資料』全五八巻別巻一〇巻(同刊行会・龍門社、一九五五)一九七一年)。

(7) 山口和雄(一九〇七年)二〇〇〇年)

東京大学/「アチック・ミューゼウム」研究員・北海道大学助教授・東京大学教授・明治大学教授・創価大学教授。日本経済・経営史専攻。『幕末貿易史』(中央公論社、一九四三年)、『明治前期経済の分析』(東京大学出版会、一九五六年)、『日本漁業史』(東京大学出版会、一九五七年)、『日本経済史』(筑摩書房、一九六八年)、『日本産業金融史研究』(編著、東京大学出版会、製糸金融篇・一九六六年、紡績金融篇・一九七〇年、織物金融篇・一九七四年)。

(8) 宇野弘蔵(一八九七年)一九七七年)

東京大学/大原社会問題研究所所員・東北大学助教授・日本貿易研究所所員・三菱経済研究所所員・東京大学教授・法政大学教授。経済学原論・経済政策論専攻。『経済原論』上下(岩波書店、一九五〇・五二年)、『経済政策論』(弘文堂新社、一九五四年)、『宇野弘蔵著作集』一〇巻別巻一(岩波書店、一九七三)一九七四年)。

金融というものに対して何か一つの思いがあつて、このテーマを選んでいこうと思われたのか、どうだったんでしょうか。

石井 初めから産業金融を選んだわけでは全然ないんです。勉強をしようと思つたのは、四年生ぐらいのときにゼミでいろんな本を読んで、経済史がおもしろいということがわかつてきたので、大学院へ進んで勉強しようと思つたのです。その当時は大学院受験の論文を出さなきゃいけないということ、一九六〇年に卒業していますから、六〇年の安保のときに受験論文を書いたのですが、当時は日本経済史研究の、あるいは歴史研究の転換期でした。それまでは、経済史というと、やはり明治維新、せいぜい自由民権あたりまでが中心のテーマだったんですけれども、六〇年安保の年に日米独占資本主義の構造こそ解明されるべきだと主張する人々が登場し、これからは資本主義そのものを歴史研究の対象とする時代が来るであろうという予感がしていました。封建制から資本主義への移行だけじゃなくて資本主義そのものが持っている問題を明らかにしなければ、現代の動きの理解にはつながらないんじゃないかということが一部の研究者によつて強調されました。そのような雰囲気なかで、新しく歴史を勉強しようという人、とりわけ近代史をやるうとする人たちには産業革命史の研究をやるうという雰囲気が出てきていました。それが何となく私、大学院の受験するときの論文テーマとも関係して、産業革命期のそれで典型的な産業である紡績業か製糸業を選ぼうかと思つたんですが、研究史が比較的ある製糸業を選び、大学院受験のときには福島と群馬と長野の比較の論文を書いたんです。その論文は活字にはならなかったんですけども、そこから入つていったんです。つまり、個別産業史から私は入つていったのです。

田崎 その場合、学内的にはもちろん、学会においても大塚久雄⁽⁹⁾先生の「大塚史学」という比較経済史の大きな流れがあるわけですね。時代状況としましては今おっしゃられました六〇年代安保とというような大きな変動、時代的な転換があるわけで、そういうことが研究姿勢とかご自身の日

(9) 大内力(一九一八年)

東京大学/日本農業研究所所員・東京大学教授・信州大学教授・大東文化大学教授。『日本農業史・経済政策論専攻』。主要著作『日本資本主義の農業問題』(日本評論社、一九四七年)、『日本農業の財政学』(農林省農業総合研究所、一九五〇年)、『日本経済論』上下(東京大学出版会、一九六三年)、『大内力経済学体系』(全八巻、東京大学出版会、一九八〇年)。

(10) 安藤良雄(一九一七年、一九八五年)

東京大学/東京大学教授・成城大学教授。現代日本経済史専攻。『両大戦間の日本資本主義』(共著、東京大学出版会、一九七九年)、『太平洋戦争の経済史的研究』(編著、東京大学出版会、一九八七年)、『昭和史への証言』全五巻(編著、原書房、一九九三年)。

(11) 大塚久雄(一九〇七年、一九九六年)

東京大学大学院/法政大学教授・東京大学教授・国際基督教大学教授。イギリス近代経済史専攻。『株式会社発生史論』(有斐閣、一九三八年)、『近代欧州経済史序説』(岩波書店、一九八一年)、『大塚久雄著作集』全一三巻(岩波書店、一九六九、一九八六年)。

本経済史研究の中でどのような形で先生に影響を与えたのでしょうか。

石井 日本経済史研究をやるうと思つたときに、私に理論的に一番影響を与えたのは大塚史学でした。これは、駒場の教養学部二年の時の経済史の授業では松田智雄⁽¹²⁾先生の授業だつたんですけれども、本郷へ来てから大塚久雄先生の授業も、直接聞くことができません、それから大塚先生が書いた本をどんどん読みました。それに惹かれていつたということがあって、大学院を受けるころには私の考え方は、直接の恩師は山口和雄先生で、労農派の先生たちの著作も読んだんですが、どうもそうした考え方は十分に日本の社会にずっと残つてきた前近代性の問題を解くのは難しいのじゃないかと思うようになり、大塚史学的な発想で日本資本主義の構造的な特質を考えようとしたということです。

何で大塚史学に引かれたのかということを考えてみると、やっぱりこれは自分個人の問題と関係してきます。社会と個人の問題ということを考えようという、これは私が当時キリスト教の教会に行つていて、高校時代に洗礼を受けて、キリスト教との関わりで自分個人というものの社会における位置について、いろいろ考えるようになってきたことが影響していると思います。そのことと大塚先生の議論がちよつと見合つような形で、近代化における近代的な個人というのは何であるのか、自立した個人でありながら同時に世界の中で人々とともに生きるとはどういうことなのかということを考えなきゃいけないと思うようになっていったということ、大塚先生との出会いというのはつながっているのです。

田崎 実際、群馬の製糸業者の中にはキリスト教者がたくさんいるわけで、そんなところにも大塚史学と石井先生の信仰と日本経済史が結びついていたのではないかなということも考えた時期があったわけですが、いかがでしょうか。

大塚史学、労農派・宇野経済学、それから講座派というような大きな潮流がある中で、そういったものをいろんな形で吸収していくなかで、何をどのように吸収し、何を切り捨てていくとい

(12) 松田智雄(一九一一年—一九九五年)

東京大学ノ東亜研究所調査員・立教大学教授・東京大学教授・図書館情報大学教授。ドイツ近代経済史専攻。『近代の史的構造論』(近代思想社、一九四八年)。『ドイツ資本主義の基礎研究』(岩波書店、一九六七年)。『社会科学の成立と発展』(放送大学教育振興会、一九八六年)。

う言い方は変ですけども、こういったものではやってはいけない、やれないというふうに思われながら自分の歴史学をつくっていかれたのかというのが、まだまだ私たちにはきちんとわからないというか、ちょっとまだ理解できないところがあります。土屋喬雄先生からは、山口和雄先生やほかの先生方を通じて、石井先生が講座派的な考えをもっていることへの不満が伝えられたとお聞きしたこともありまして。

本当に三つの大きな柱という潮流がある中で、学問的研鑽をされるというようなことの中で、どのように先生の中でその三つの大きな潮流が統一されるものとなったのかというのをもう少し詳しくお聞きしたいんです。

石井 そのことを私も悩んでたんですけど、どうしたらいいかわからないという状態が学生時代の私にありましたね。もう少し考えてみますと、大学院に入って、ちょうどあの年でしたが、大石嘉一郎さんの処女作が出た年は六〇年ですか。

田崎 大石先生の『日本地方行政財政史序説』は、六一年です。

石井 それを大学院に行つて、みんなで読んだことがありましたが、私自身は大変感動して読んだんです。悩んでいる中で一つの指針を与えてくれたのはやっぱり大石さんのとらえ方ですね。

山田盛太郎さんの構造論を持ちながら、しかし同時に、それではまずいというふうな服部之総さんが批判されて、一種の構造論を発展論によって、作り直すということをやっているわけで、相互に影響を与えながら講座派の理論は成長したと思うんですね。しかし、同時にそれだけで果たしていいのかということと戦前米の労働派の批判があるわけです。それを両方うまく統合する理論の枠組みをどうつくるかで悩んでいたのですが、大石さんの理論というのはそういう意味での統合の試みなんです。なるほどと思ひまして、大石さんの議論を一生懸命勉強したという記憶があります。土屋喬雄先生が私の考え方を批判されていたことを知ったのは、大分あのことです。もうその頃は考え方の違いをただ批判されても無意味ではないかと、開き直っていました。

(13) 山田盛太郎(一八九七年—一九八〇年)

東京大学/東京大学教授・専修大学教授・龍谷大学教授。日本資本主義発達史専攻。『日本資本主義分析』(岩波書店、一九三四年)。『日本農業再生産構造の基礎的分析』(土地制度資料保存会、一九六二)。『山田盛太郎著作集』全五巻別巻一(岩波書店、一九八三—一九八五年)。

(14) 服部之総(一九〇一年—一九五六年)

東京大学/東京大学副手・東洋大学講師・法政大学教授。日本近代史専攻。『黒船』(三和書房、一九四六年)。『明治の政治家たち』上下(岩波書店、一九五〇年)。『近代日本のなりたち』(創元社、一九五三年)。『蓮如』(理論社、一九五五年)。『服部之総著作集』全七巻(理論社、一九六九年)。『服部之総全集』全二四巻(福村出版、一九七三—七六年)。

たね。

田崎 そういったものを念頭に置きながら、群馬の蚕糸業の研究をされたわけですが、前に先生にお聞きしたことがあるんですけども、院生時代はバイトが忙しくて、そのバイトの関係で遠いところの調査ができないと。バイトしながら調査できるのは関東近県しかなかったみたいなの、お話もされてましたし、そのときにバイトが忙しくて、実は読まなければならぬ本を幾つか読んでいない。それが非常に自分としては心残りであるみたいな話をさせていただきます、基本的な文献すら読んでいない私など、何も話できなくなってしまうわけですが。

蚕糸業を通じて戦前日本資本主義の構造的特質を明らかにするというものの限界みたいなものを感じなかったんでしょうか。例えば、山田盛太郎先生ですと、もう明確にあの段階においてはそんな古い産業をやって意味があるのか、これからは鉄鋼業であるとおっしゃってます。主軸になっている産業をやらなくて経済学の意味があるのかみたいな議論をいろいろと院生、または近くの研究者に挑発的に言っていたというようなことがあるわけです。その中である意味では斜陽産業化してくる蚕糸業を選ばれる。その中で『日本資本主義分析』を語られるというようなことに若干のこだわりといったものが、どのような形であったのかということもお聞きしたいです。

石井 それはね、山田先生の『日本資本主義分析』そのものが現状分析なんですよ、あれは。歴史の本じゃないというふうに私は思っていましたね。ですから、現状分析をやる人にとってみると、例えば一九六〇年ごろであれば鉄鋼業を問題とするわけです。山田先生自身もテーマをかえて鉄鋼業研究会でしたか何か研究会を組織されて一生懸命やっておられました。それは現状を分析する人にとって当たり前だと思うんですね。ただ、歴史をやる人間からすると、それぞれの時代に重要な産業があるわけですから、それを通してその時代の全体像を明らかにすること、どうしても必要だと思えますね。

田崎 また産業金融の話に戻させていただきますと思うんですけども、先生の最初のご本は矢



木村明夫先生の『日本近代製糸業の成立』⁽¹⁵⁾に対する痛烈な批判ですね。自生的に小さな経営が大きくなっていく。そして長野の製糸業が巨大化したのではないかと矢木先生の考えを先生は批判されました。石井先生の蚕糸業史研究に、実は横浜の産業金融と結びついたものが、生き残れる。そして、それに結びつかなかった福島、群馬という古蚕糸が没落していくというような歴史像があります。これは日本資本主義のあり方自体に、多くの産業について言えることです。日本の資本主義の発展自体が財政主導ではなく金融主導になっていると。まさに金融の網の目の中で私たちの生活自体、ありとあらゆる場面が包摂されていく中で社会が構成されていくというような見方で読めるんだなというふうに読んだ記憶があります。その構造自体につきましては戦後一貫して日本のあり方というのが、そういう形で動いてきたというふうに思っております。

最初の『蚕糸業史分析』の蚕糸業という産業を扱う中で、実は戦後の六〇年代、七〇年代の日本の姿と日本の産業発展のあり方というものもそういったもので見通せるというようなことがあるんだというふうに、ちょっと読んで感動した記憶があります。

石井 そうですね。逆にいうと、やっぱり高度成長のことを横目で見ていたわけですから、その問題意識から解釈するような視線で研究するわけで、そういう意識も頭に置きながら歴史を見ているというのが多分あったんじゃないかと思います。今から考えてみるとね。

ただ、金融の問題をなぜ扱ったかという点、私、後から考えれば今みたいな説明もできませんけれども、実際に金融の問題が大事だってわかるようになったのはドクターコースに入ってからなんです。私、マスター論文は群馬県のことを書いたんですけど、これは先ほどちょっと名前が出た矢木明夫さんの研究をどこかで批判しなきゃいけないなと思いつきながら、しかし、長野へは遠すぎてちょっと行けないもんですから、研究が比較的好くれている製糸業地ということと、比較的その当時は、研究がやられてないところをまずやってみようというくらいのもりで群馬県のことを調べ始めたんです。群馬県については座繰製糸業といっても家内工業だけじゃなくて大工場

(15) 矢木明夫(一九三三年)

東北大学/東北大学教授。『日本近代経済史専攻』、『日本近代製糸業の成立』(御茶の水書房、一九六〇年)・『身分の社会史』(評論社、一九六九年)・『封建領主制と共同体』(塙書房、一九七二年)・『資本主義発達史』(評論社、一九七三年)・『日本経済史』(評論社、一九八二年)。

があるという説が当時も唱えられていましたね。

田崎⁽¹⁶⁾ 山田舜先生は、福島県にも座繰の大工場があるというような言い方をしていますね。

石井 それを一方では確かめてみたいと思って、群馬県に組合製糸というのがあるんですけども、その家内工業が集まって、出荷組合をつくっている。その組合製糸の連合体の事を間違えて大工場と言ってるんじゃないかと。実際の組合製糸の繰糸工程は各家々でやってるんじゃないかということ確かめたいと。仮にそうであったとした場合でも農村の家内工業がかなり発展を遂げて大規模化していく、それこそ矢木さんの言う下からの発展があったかもしれないというふうに思っただけです。それを確かめるには農村に入っていくしかないと思って、マスターのときには二年間かけて碓氷郡その他の農村をずっと歩いて、養蚕業のことだとか座繰製糸業のことを、詳しく調べようと思っただけです。しかし、製糸経営に関しては結局、十分には究明できませんでした。養蚕経営に関してはある程度わかったんですけども。ただ、それまでも言われていることが大体確認できて、やっぱり基本的には家内工業、せいぜい女工さん四、五人ぐらいが集まってやるということはあったけれども、集中作業場ができていくわけじゃないということが確認できました。だから、養蚕業もそうですけど、群馬農村における自生的発展というのは、結局はそのままの形で工場制工業に発展するのではないということを確認したわけです。これは後で、農村近代化、資本主義の発展が農村をどこまで近代化できたのかという、その限界を私は把握しようとするのですが、その理解の基礎作業にはなっただけだと思います。

ドクターコースに入って、やっぱり座繰だけでやったんじゃないだろうと思っただけで、長野に行きたかったんだけど、お金がないから、山梨なら日帰りできるということで、山梨をフィールドに研究をしました。山梨県では予想以上に明治の一〇年代は製糸業が発展しており、甲府なんかには諏訪にないような大工場がいくつもありますし、農村には小さな製糸工場がいっぱいあるわけですね。あそこにはたくさんさんの銀行類似会社があって、資金を借りることができる。

(16) 山田舜(一九二六年)

東京大学/福島大学教授・東日本国際大学教授。『日本経済論専攻』、『日本封建制の構造分析』(未来社、一九五六年)、『県史シリーズ』 福島県の歴史(共著、山川出版社、一九七〇年)、『福島県の産業と経済』(編著、日本経済評論社、一九八〇年)。

女工さんもいっぱいいます。養蚕も非常に発達していて、これは諏訪なんかにはないことなんです。そういう意味ではお金にしても物にしても人にしても、明治一〇年代の製糸業の発展の基礎条件というのは、長野県の諏訪などよりも山梨の方があるということが分かりました。ところが、二〇年代以降になると、どんどん諏訪の方へ山梨の繭が買っていくられる、あるいは女工さんが引つ張っていかれる。山梨はそういう諏訪製糸家の草刈り場になっちゃうんですね。なぜそんなのかということいろいろ調べていくと、一つの大きな理由はどうやら横浜の売込問屋が諏訪の製糸業の発展を誘発していることにあるということに気がついて、金融が生産のあり方を、むしろ引つ張っていくような、そういう相対的に独自の役割を果たしたんじゃないかと思つて、最初の器械製糸の論文を書いた。ですからドクターの二年ぐらいですよ、はつきり金融のことを意識するようになったのは、ちょうどそのときに山口先生も同じような考え方を持たれていて、長野の十九銀行という今日の八十二銀行ですけど、その研究をもとにして、さらに広げて産業金融史研究のグループをつくらうとされたのです。一九六三年の五月でしたか、製糸業を産業金融の観点からやつたらおもしろいかもしれない、みんな集まれというのが、当時は水沼知一さんや杉山和雄さん⁽¹⁸⁾、中村政則さん⁽¹⁹⁾、高村直助さん⁽²⁰⁾、それから私などが集まって産業金融史の研究グループをつくることになりました。これはお金が日本産業経済研究施設という東大経済学部の中にできた研究施設、そこから調査費が出るようになったので、毎月のようにその調査費を使って調査に出かけました。

二 日本産業革命研究の本格化

田崎 基本的に院生時代はそういった研究視角でやられていかれ、続いて大石嘉一郎先生が東大に戻られます。その前に先ほど話が出ましたけれども、六〇年代安保の動きの中で東北大学の吉岡昭彦先生が、今まで封建論争または寄生地主論争が日本経済史のメインテーマであるといふ

(17) 水沼知一(一九三〇年～一九九八年)

東京大学大学院/東京大学助手・東京都立大学教授。『日本経済史・ウェーバー研究専攻』『都市の発展・過密化が中小零細企業に与える影響』(共著、東京都立大学都市研究委員会、一九七四年)、『昭和恐慌』(共著、有斐閣、一九七四年)。翻訳『ピエトロ・ロッシ』著、マックス・ウェーバー講義 歴史主義から歴史社会科学へ(みすず書房、一九九二年)。

(18) 杉山和雄(一九三二年)

東京大学/成蹊大学教授。『日本経営史・金融業史専攻』『戦間期海運・金融の政策過程』(有斐閣、一九九四年)、『金融危機と地方銀行』(編著、東京大学出版会、二〇〇一年)、『トマス・C・スミス』著『明治維新と工業発展』(翻訳、東京大学出版会、一九七一年)。

(19) 中村政則(一九三五年)

一橋大学大学院/一橋大学教授・神奈川県立大学教授。『日本近現代経済史専攻』『近代日本地主制史研究』(東京大学出版会、一九七九年)、『日本近代と民衆』(校倉書房、一九八四年)、『象徴天皇制への道』(岩波書店、一九八九年)、『明治維新と戦後改革』(校倉書房、一九九九年)。

(20) 高村直助(一九三六年)

東京大学大学院/横浜国立大学助教授・東京大学大学院/フェリス学院大学教授。『日本近現代経済史専攻』『日本紡績史序説』上下(塙書房、一九七一年)、『日本資本主義史論』(ミネルヴァ書房、一九八〇年)。

うに思われていたけれども、もはや戦後改革は終わった。これからは資本主義そのものを分析しなければならぬという有名な吉岡提言というものを踏まえる中で、産業金融の流れといったものを背景に持ちながら、同じように研究していた院生グループの流れというものを引き継ぐ形で大石嘉一郎先生をリーダーとして、日本産業革命研究というものに移られるわけです。そのときの思い出などを次にお伺いしたいというふうに思います。具体的に、これもびつくりしてまうような人事ですけれども、宇野経済学の大内力先生が大石嘉一郎先生を呼ぶというような形で東大に戻られて、すぐさま日本産業革命研究会というようなものをつくられたんですね。さきほども石井先生が大石先生の『日本行財政史序説』のフレイム、枠組みというものに非常に共感したというような話がありましたけれども、そういつた中で大石先生が東大に移られました。最初に日本産業革命研究の提唱をされたというのは、いろいろ言われてはいるんですけれども、どなたのところからこいついつた話が出てきたんでしょうか。

石井 こいついつた話というのは。

田崎 日本産業革命研究会をつくって共同研究をしていこうと考えたのですか。

石井 大石先生と僕がお会いしたのは、先ほど言いました産業金融史研究会というのができて調査を始めて、まず福島に行ったんです。すでに、伏黒村には古島敏雄・高橋幸八郎両先生のグループが入られて、大石先生も加わって『養蚕業の発展と地主制』(御茶の水書房、一九五八年)という優れた研究成果を出しておられました。水沼さんと私と杉山和雄さんと山口先生かな。六三年六月に二度行きました。二度目のときに、このときは山口先生は行かなかったのですけれど、庄司吉之助先生にお会いしたし、大石先生にもお会いして、昼食を一緒に食べながらいろいろ話をしました。大石先生は歴史学研究会で産業革命の報告はこの年だったかと思いますが、歴研で報告する大分前にも、東大の社会科学研究所への人事の話がいつたん出ていたと聞いています。僕は話をしている、大石さんが東大に来てくれるといいんだけどなあと思ったことを今でも覚え

『近代日本綿業と中国』(東京大学出版会、一九八二年)・『会社の誕生』(吉川弘文館、一九九六年)。

(21) 吉岡昭彦(一九二七年-二〇〇一年)

東京大学大学院/福島大学教授・東北大学教授・二松学舎大学教授。イギリス近代経済史専攻。『イギリス地主制の研究』(未来社、一九六七年)・『近代イギリス経済史』(岩波書店、一九八一年)・『インドとイギリス』(岩波書店、一九七五年)・『帝国主義と国際通貨体制』(名古屋大学出版会、一九九九年)。

(22) 古島敏雄(一九二二年-一九九五年)

東京大学/東京大学教授・一橋大学教授・専修大学教授。日本農業経済史専攻。『日本農学史』第一巻(日本評論社、一九四六年)・『江戸時代の商品流通と交通』(御茶の水書房、一九五一年)・『古島敏雄著作集』全一〇巻(東京大学出版会、一九七四-八三年)。

(23) 高橋幸八郎(一九二二年-一九八二年)

東京大学/京城帝国大学助教授・法政大学助教授・東京大学教授・早稲田大学教授・創価大学教授。フランス近代経済史専攻。『近代社会成立史論』(日本評論社、一九

ていますよ。そのことは僕だけじゃなくてみんなも考えていたし、社研時代（一九五七年一〇月迄）の大内力先生も考えていたし、安良城盛昭先生も社研に入っておられましたからね。大石先生の大東招へいがすんなり決まった条件が、東大内部にあったんだと思います。

大石さんが福島から東大へ来られたのは六三年の秋でしたが、六四年の四月ごろに研究会をつくろうということで我々、大石さんの下に集まって相談した記憶があります。大石さんは東京の若手を集めて研究会を作ろうということも多分考えながら東大へ来たんだと思いますよ。

実はそのちよつと前に、東京の若手の日本近代史の研究者を集めて、中村君とか私らを中心につくっていた明治史研究会というのがあって、そこで山田さんの『日本資本主義分析』をどう読むかなんていう議論もやってたんですけど、なかなかうまくつかめませんでした。私、覚えてるのは、山田さんの『分析』をどう読むか、東京の経済史研究者がどういうふうに読んでるか聞きたいと言われて、私はその研究会で山田『分析』を私はこう読んでいるんだと報告したことがあります。六四年の三月のことです。私としては山田さんの『分析』は日本資本主義発達史講座全体のなかのひとつのセクションについての理解を出してやるわけで、『分析』としては講座の三論文を集めて一つの体系をつくったわけですけども、やっぱり資本主義全体の構造分析を十分に行うためには『分析』の部分だけを使うわけにはいけません。それは市場問題にする財政の問題にしる、全体として明らかにするためには、『分析』以外の講座の諸論文の扱う部分を含めて、資本主義の総体的な、総合的な把握をしなきゃいけないと思う、と報告しました。

大石さんが出てこられて研究会をやったときに、最初に読んだのは山田さんの『分析』でしたけれども、それをどう読むかというときに私はもう少し広い視野から『分析』の位置づけというのをやった上で、使えるところは使って、批判すべきところは批判して読んでいかなきゃいけないということを書いた覚えがあるんです。大石さんも同じようなことを考えておられて、『分析』をあれほど詳しく読んでいる人はいないし、すごく読みが深いことにびっくりしたんです

四七年）。『市民革命の構造』（御茶の水書房、一九五〇年）。『歴史と経済』（御茶の水書房、一九五一年）。

(24) 庄司吉之助（一九〇五年～一九八五年）

福島第二小学校／福島高等商業学校嘱託・福島大学教授・上武大学教授。日本近代史代経済史専攻。『明治維新の経済構造』（御茶の水書房、一九五四年）。『直し一揆の研究』（私家版、一九五六年、校倉書房、一九七〇年）。『近世養蚕業発達史』（御茶の水書房、一九六四年）。『庄司吉之助著作集』全五巻（吉川弘文館、一九八一～八六年）。

(25) 安良城盛昭（一九二七年～一九九三年）

東京大学大学院／東京大学助教授・沖縄大学教授。大阪府立大学教授。日本近代経済史・沖縄史専攻。『幕藩体制社会の成立と構造』（御茶の水書房、一九五九年）。『日本封建社会成立史論』全二巻（岩波書店、一九八四・一九九五年）。『天皇・天皇制・百姓・沖縄』（吉川弘文館、一九八九年）。

れども、やっぱりある意味で批判的に読んでいますね。そういう読み方があるなどということを知って、びっくりすると同時にプレッシャーも感じた。私がこうでなきゃいけないだろうけど、よくわからないなと思っていることを既に大石さんがやりかけていた感じでしたね。

田崎 同時に西洋経済史の方でも産業革命研究を高橋幸八郎先生らが始められます。毛利健三先生はもう少し後ですね。そうしますと高橋先生の周辺の人々による産業革命の研究という一連の動きもあるわけですね。その当時の石井先生はどのように日本産業革命研究をするというスタンスとして、彼らの動きを横目で見ていたということになるのでしょうか。

石井 やはり大塚史学というと産業革命というのは研究の終点みたいな感じで、そこまでは何とか明らかにするんだけど、その先が問題ですよ。何でイギリスで最初に産業革命が起こったのかをいろいろ説明してくれるんですけど、そこででき上がったイギリス資本主義というのは、その後どう展開して帝国主義に転換していった、世界経済の中枢となるのかどうもはつきりしない。日本との話になかなかつながらないと感じながら大塚史学の成果を読んできましたね。その点をやってくれたのは吉岡昭彦さんや毛利健三さんだと思います。ただ、このときはまだそうした成果は出てませんからね。

これは後で私、申し上げる機会があれば申しますけど、やっぱり大塚史学というのが持っていた一つの限界というのを示してるんじゃないかなと、後で思うようになりました。

田崎 山之内靖先生のイギリス産業革命の研究というのは、そういった中でどのように先生は読まれたんですか。

石井 『イギリス産業革命の史的分析』ですか。あれについてはおそらく大塚先生ご自身がかなり厳しい評価をされたのではないかと思います。やはり毛織物業のマニユファクチュア分析からじゃだめだと。産業革命の基軸が綿業だということをきちんと説明していないと、私も思いました。

(26)

毛利健三(一九三四年)
東京大学大学院/福島大学助教授・東京大学教授・専修大学教授。イギリス経済史専攻。『自由貿易帝国主義』(東京大学出版会、一九七八年)、『イギリス福祉国家の研究』(東京大学出版会、一九九〇年)、『現代イギリス社会政策史一九四五―一九九〇』(編著、ミネルヴァ書房、一九九九年)。

(27)

山之内靖(一九三三年)
東京大学大学院/東京外国語大学教授・フエリス女学院大学教授。イギリス経済史・マルクス経済学理論専攻。『イギリス産業革命の史的分析』(青木書店、一九六六年)、『マルクス・エンゲルスの世界史像』(未来社、一九六九年)、『社会科学の方法と人間学』(岩波書店、一九七三年)、『マックス・ヴェーバー入門』(岩波書店、一九九七年)。

田崎 そういつ切られ方だったんですね。

石井 山之内さんはちょっと行き詰って、思想史研究への道を探すことになったのだろうと思います。

田崎 また日本産業革命の研究の方に移りたいと思いますけれども、実際に山田盛太郎先生を呼んで、いろんな話を聞くという機会も設けられた。

石井 はい。

田崎 そういつた中で伺い聞くところ、大石嘉一郎先生がいわゆる一般的、特殊の問題をどのように把握するのかということ、そこはもう石井先生の見解とかなり対立する部分もあるわけですね。その点につきましては、どうしてそこまでこだわりを持つのだろうかというふうに我々は石井先生のテキストを読んだものなんですけれども。いわゆる理論的か歴史具体的かという言い方と、イギリスで具体的に起きたこと、それから日本で展開したことというような、そういった読み方の中で『日本資本主義分析』の自身がそれによってどのように変わってくるんだろうか。我々の読み方が足りないのかもしれないんですけど、それをお互いに、そうではないという言い方をする中で、それじゃそういうことを言うことによって山田『分析』がどのように新たに読めるのかというか、どういう視角になっているのかというのが私たちにはわからなかったんですね。

石井 ああ、そうですね。やっぱり日本資本主義を分析する場合に、ここは後進国なので、後進国に独自の産業革命が起きているという見方が必要だと山田先生も書いておられると私は読んだわけですね。具体的に言う例えは、工作機械なんかの捉え方が出てきますよね。

田崎 産業革命の見通しの問題ですね。

石井 ええ、見通しの問題ですね。一応後進国では、生産手段生産の見通しが確立したところで産業資本が確立したと山田先生はおっしゃっていますね。ですから、これは後進国としての把握

だと私は理解していたのです。ところが、大石さんに言わせると、いや、先進国のイギリスだつて見通しの確立ぐらいいかないんだという言い方をされたわけですね。これは大内先生なんかも言っていることなんです。機械工業つて言つたつて発展がまだまだこれからという時期にイギリス産業革命は展開したと。産業革命というのは基本的には綿工業中心に起こるのが通例だというわけです。大石先生は、機械工業はイギリスでも限界があつたということを考えると、イギリスと日本もその限りでは似てるんじゃないかという形で、大内先生の議論をいわばある程度取り込みながら山田説を理解しようとしたんだと思うんです。私は、それは違うんじゃないかと思つているのです。

田崎 それと山田盛太郎先生についてもいろいろと伝説的なことが語られるわけですが、実際にお会いした感想などを聞きたいです。

石井 そつですね、山田先生というのは、私は講義などで直接教つたことはいないんですけど、研究会で初めてお会いして、なかなか慎重に言葉を選びながらしゃべる方だと感じました。これはどういふことですかと質問をすると、「うーん」と言つて、すぐに答えませんよ。こつちは、みんな、しーんとして待つていて、大分時間がたつてから「あの」とか言つて答えられるんですね。そういう点で非常に慎重に言葉を選んで答えられるというところで、ちよつとびつくりしたんですけれども、おつしやる中身はやつぱりよく考えられただけあつて感心しました。そこで、私もちよつと書いたことがあるんですけど、一番驚いたのはやはり山田先生に、『日本資本主義史分析』ですけれども、あれを今あらためて、先生がお書きになつたら、違つて感心で書かれますか、やつぱり同じこと書かれますか」つて聞いたたら、それについては今の視点からすれば違つた書き方になります。現在の視点からは違つたことを書くでしょうと言われたことで、なるほどそついうものかと思ひましたね。

田崎 長岡新吉先生の『日本資本主義論争の群像』⁽²⁸⁾の中で、あれは奴隷の言葉で書かざるを得な

(28) 長岡新吉(一九二二年)

東京大学大学院ノ北海道大学教授・北海学園大学教授。日本近代経済史専攻。『明治恐慌史序説』(東京大学出版会、一九七一年)・『産業革命』(教育社、一九七九年)・『日本資本主義論争の群像』(ミネルヴァ書房、一九八四年)・『近代日本の経済』(ミネルヴァ書房、一九八八年)・『世界経済史入門』(ミネルヴァ書房、一九九二年)。

かったところもいっぱいあるんだみたいな話もありましたけれども、山田盛太郎評としまして彼自身の心性というかそういうものの中に封建的な要素が非常に強くて、だからこそ講座派的な議論ができるみたいな、そういうた悪口も存在するわけですけども、そんな印象は受けましたでしょうか。

石井 このときにはそんな感じはしませんでしたけどね、後に山田先生のお弟子さんたちという議論する機会があつて、私は、やっぱり山田先生自身の個性のようなものが次第につかめてきました。天皇制批判を最も鋭くやった山田先生が、みずから実はある意味で天皇なんですよ。というのは、お弟子さんたちに対して物すごく厳しいし、お弟子さんに対して、ここまでは弟子として認めるが、ここからはだめだと、非常にはつきりしていたようです。お弟子さんたちは山田先生に楯突くことはできない状態だったということを知っていて、やっぱりひとつの学派をつくる先生というのは、弟子に対しては権威主義的だったのだなと感じました。

田崎 それは大塚久雄先生にも若干言える部分もあると言われる方もいらつしゃいますが。

石井 若干どころか、かなり言えますね。そういう点であえて悪口を言えば、大塚さんはお弟子さんの育つ芽も潰しちゃうんですよ。つまり、自分の見解を批判する者に対しては、むきになつて否定しますからね。だから大塚先生の議論の枠を越えた発想が出てくる場合、それは外へ行って、学派からは外れた形で言うしかないんですね。大塚史学もいまや新しくなつて、大塚さんの説を批判して乗り越えていくっていうか、あるいは、現代的にも大塚先生と違ったことを言わなきゃいけないという時期が来ているわけですよ。ところが、なかなかそれができないんですね。そうした批判がなぜ必要かという、ちょっと話が先に進んじやいますけどいいですか。

田崎 はい。お願いします。

石井 調べてみると、大塚先生はその時代の状況をじつと見据えながら研究されていて、今、日本に対して自分は何を発言しなければいけないかといったような観点から、イギリスの歴史研究

をやっておられたんですね。イギリスの歴史をやっていると言いながら、本当のねらいは日本の国民に対してふさわしいメッセージを史実から再構成することにあるわけですね。それは大塚さんなりの理念型という方法によって可能になるわけで、法則と違うところは、理念型っていうのは価値観点によって、どうにでも細工できちゃう、構成できちゃうところがあるでしょ。それを大塚さんは今の時代の日本にはこういう分析が必要である、当時の日本の現実的課題のことで言えば、国民国家を形成するにはどうしたらいいかをメッセージとして言わなきゃいけないと考えられて、基本は国内市場で、そこに基礎を置くことによって健全な国民経済・国民国家ができる主張されたわけですね。ですから、農地改革、農民の主体ということも、そのモデルはイギリスにあったというんですね。イギリスであつたということをおっしゃるときに、モデルになるロビンソン・クルソーについて、経済的合理的な経営をいかにして孤島で実現したかとおっしゃって、これこそが近代的人間類型だと言われるわけで、それはそれでおもしろいんですけど、実際にはロビンソン・クルソーの話にはフライデーという従僕がすぐに入ってきているわけです。フライデーと一緒にロビンソン・クルソーは生活していたんです。それにもかかわらず大塚先生は、何でフライデーをカットしたんだろうかという議論をしたことがあります。

やっぱり、当時の日本はフライデーを失っている状態、つまり、植民地を失った状態ですから、日本の国民経済の形成はフライデーなしでもやれるということを言わなきゃいけない。だからこそ、フライデーが加わって、ロビンソン・クルソーと二人で一緒になってイギリスの初期資本主義を形成したという側面を、あえてカットしたのではないでしょうが。そういうことは、当時の日本に対するメッセージとしては意味があつたけれども、現実にイギリスのその後の歴史的な展開を説明する道具としては、なぜイギリス人が世界の七つの海を支配して、たくさんのフライデーをつくつたかという説明ができなくなる。イギリス史を研究する人から見ると、大塚さんのロビンソン・クルソー的イギリス人じゃだめなんですよ。やっぱりイギリスの商人というのは、



石井 寛治 氏

世界中で活躍して、巨大な帝国をつくるわけですから、それを説明できるようなイギリス人が近代を形成するという歴史像を構成しなきゃいけないんです。

田崎 それも踏まえた上での日本産業革命研究、それこそ、これからフライデーをつくっていく中で産業革命を成し遂げていく日本、そういったものの研究に進まれるわけですけれども、そこでもいろんな学問的エピソードがあつたと思います。何かここでご披露できるような話がありましたら、お願いできませんでしょうか。

石井 産業革命研究会は随分勉強になりましたね。水沼知一さんという当時東大経済学部の助手をされていた方が、実際には我々と大石さんの間をつないでくれていて、水沼さんがのおかげでもつていた面があつた研究会ですけども、途中で水沼さんは話が合わなくなつたというか、けんかして飛び出しちゃつたんです。あと安良城盛昭先生も最後は大石先生と離れて、最後は残つた人間だけであの本をつくつたんです。一九六四年の四月から始まつて、『日本産業革命の研究』上下巻を出したのが一九七五年の六月と一〇月ですから、一〇年以上続きました。その間に東大紛争が入つてしまつて、私はなかなか研究ができなくて、本そのものも結局計画どおりにはできませんでした。大石さんが歴研大会で、あれ一九六三年でしたかね、報告されたときの準備会でね、山田盛太郎氏の方法を現代的に再構成するとか言つて、それを具体化する方法を発表しましてね。それはそれですばらしかつたんですけど、出席された遠山茂樹先生(註)がおもしろいこと言つたんですよ。「大石さん、それはわかるけれども、では日本の帝国主義をどういうふうに理論的に考えたらいいのでしょうか」って聞いたんですよ。そうしたら大石さん、そのときはすぐに答えられなかつたんですね。我々は産業革命をやるつてというのは、日本の資本主義と帝国主義、その関連を明らかにすることを課題としていてと思つてたわけです。出発点は山田説を批判的に継承するつていうことになる、山田説は産業資本の確立が実は帝国主義転化であるといつ、同時確立説でした。その問題をもつと立ち入つてやらなきゃいけないということを我々も考

(29) 遠山茂樹(一九一四年)

東京大学/東京大学史料編纂所所員・横浜市立大学教授・専修大学教授。日本近代史専攻。『明治維新』(岩波書店、一九五一年)・『昭和史』(共著、岩波書店、一九五五年)・『戦後の歴史学と歴史意識』(岩波書店、一九六八年)・『自由民権と現代』(筑摩書房、一九八五年)・『遠山茂樹著作集』全九巻(岩波書店、一九九一〜一九九二年)。

えながら産業革命研究をやりました。ただ、その分析は財政問題を分担していた大石さんの仕事だったので、中村君が歴研大会で日清戦後経営論の問題提起をしたときだったにもかかわらず、それを取り込むことができなかつたという反省がひとつあります。それと、もう一つ。

やはり遠山さんが何かによつと書いておられたと思いますが、産業革命史の研究を読むと、当時の産業のことはよくわかるけれども、そこで生きる民衆の生活が産業革命の結果どういふふうに変つたかとか、産業革命は日本の民主主義に何をもたらしたか、そういうふうな側面が余り見えてこないと書いておられました。私は、それはもっともだと思いますね。資本の発展に必要な労働力がどういふふう調達され使用されたかということは、我々も必死になつて調べて書いたんですけれども、それは資本の運動にとつて日本の民衆がどういふ意味を持ったかということを書いてあるわけで、逆に日本の民衆にとつて、産業革命がどういふ生活の変化なり意識の変化をもたらしたのかということがあまり問題にされなかつたということを反省させられましたね。その問題はその後いろんな形で研究されてきたと思いますけれど、まだ充分とは言えないでしょう。

田崎 また、日本産業革命研究の話なんですけれども、中村政則先生がその後、天皇制国家と地主制と資本主義の三者同時確立だという有名な「地主制」明治三〇年代確立」説を発表されるわけですね。理論的にはすっきりするような話なんですけれども、具体的にそついった形でしか構造的にできないというふうな見方については、ほかのメンバーたちはどのように思われていたのでしょうか。

石井 あの論争は安良城先生と中村さんの論争でしたね。

田崎 はい、地主制の二〇年代に成立か、三〇年代に確立か。質的なのか量的なのかという問題であるわけですね。

石井 山崎隆三他『シンポジウム日本歴史一七地主制』（学生社、一九七四年）という本があるん

ですが、そこでも議論をやってるんですよ。もし安良城さんが『日本産業革命の研究』の執筆陣に入って書いておられれば、その問題をもっと厳密に扱えた筈だったと思いますが、一九七五年に刊行されたときには、安良城さんが抜けて、ご自身で論点として整理をすることはできなくて、中村・安良城論争としてずっと続いている。さらに、一番大事なところで抜け落ちたのは、やっぱり財政問題でした。研究会の中ではそれなりに議論していましたけれども、これも欠陥の一つだと思います。

田崎 あと、別に労農派、講座派という色分けをするつもりはないんですけども、高村直助先生がお一人労農派的な宇野経済学的な立場として入ってらっしゃるところで何か相互の論争といったこともあったんでしょうか。

石井 それも大いにありましたよ。議論するときはやっぱり必ず出てきます。大石さんというのはおもしろい人で、もともと大内力先生の弟子であつたわけですね。ですから、かなりよくわかつてるわけですよ、労農派の発想というのはね。それで、やっぱりだめだなと思って大石さんはその枠を抜け出すわけです。ですから大石さんの体系の中には労農派的発想も全部入っている。折衷じゃないかという批判もあるけれども、大石さんなりに位置づけをやって両方を統合するんだという気持ちでやってこられましたから、高村さんが入ってきたのは大石さんにとってみれば、むしろおもしろいのが入ってきたという感じで何とか高村さんの議論も組み込みながら理論を立てようとされましたし、ある程度は、それはできていると思います。

田崎 安良城先生については晩年、ちよつとフアナティックになつていたところがあつたんですけど、そのときはきちんとした議論というのではできただけですか。

石井 時期によって違いますけど、最初のうちは非常にいい議論をしておられましたね。安良城先生って、やっぱり論文の読みが深いというか、私たちの研究会でも非常にうまくロジックを使って相手の説を論破するので、我々にも非常に参考になりましたし、私が『日本蚕糸業史分析』

を書く上でも、安良城さんや大石さんとの議論は非常に役に立ちましたね。

論文というのははじめから相手を論破することを目的として読むのではなく、最初はその論旨を正確に理解しようとして読む。二回目はノートとりながら相手の論旨の矛盾などに注意して読み、三回目におかしいところについて徹底的にチェックする。三回読まないで論文の批判というのはできないと言われたのをよく覚えてます。

それから全体の構造的な把握をどうするかについても、例えば、僕の日本蚕糸業の分析について言われたことは、僕は矢木明夫さんのように、下からの発展という命題をそのままの形では支持しないで、それはむしろ全体の構造の中で、金融的な施策なんかを支えられて発展したと主張したわけですが、安良城先生は、そのようにいけば上からの資本主義が進んでいく中で、そういう一見下からの発展だと見えるものが必要であるということを見抜かなければいけないと言われました。下からの製糸資本の発展が金融機関を利用したっていう単純な話になっちゃうのじゃなくて、上からの資本主義が展開してくる中で、そういう一見下からの発展に見える蚕糸業的な発展というのが組み込まれて、いわば誘発された発展を遂げるのではないかということを言われて、発展を構造的にとらえるべきだということを教わりましたね。

田崎 一九六三年の歴史大会で樋口徹先生が発表された、都市商人的な発展という言い方でしょつか。大塚史学批判として、下からの発展だと確かに起動力かもしれないけれども、常に上からの動きが、その動きを吸収しながら自分のものにしていく。それが歴史なんだみたいな、そういう議論をされましたね。

石井 そうですね。樋口さんの発表の記憶はありませんけれども、もし、そう言っているとすればある程度まで言えると思うんですね。しかし、イギリスでそれが言えるかどうかについて僕はちょっと疑問だ。けれども、一般論としてそれがあるんですね。

田崎 上からのというよりも都市のという、農村からの展開ではなくて、まさに都市商人層がそ

(30) 樋口徹(一九三五年)

東京大学大学院/千葉敬愛短期大学講師・福島大学教授。イギリス経済史専攻。「大塚史学批判の問題点」(『歴史学研究』第三二九号、一九六七年一〇月)・G・アンウイン著『ギルドの解体過程 一六・七世紀の産業組織』(翻訳、岩波書店、一九八〇年)。

の状況に応じた形で自分を変えていくと。それが主流になっていくといった見方だったと思ひますけど。

石井 でも、それは大塚先生に言わせると、現象としてはそう見えるかもしれないけど、そういう転換を余儀なくさせたのは農村工業の力強い発展である。それに対して都市商人が対応していく。だから起動力はやっぱり農村にあつて、そこから発展したということが大塚さんだったらイギリスに関しては言うでしょうね。僕の言つてるのは、日本の場合はやっぱり、先ほど群馬県の蚕糸業についてちょっと言つたみたいに、下からの発展の安定性が見られない中で、しかし、製糸業で見ると、長野県の農民層の内部から出てくるような、製糸資本家の中から短期間のうちに一万人の女工を雇う片倉組のような巨大資本を生み出す。あのような大規模な製糸資本は中国にもイタリアにもフランスにもないのです。世界最大規模の製糸資本が、あつという間に三〇年ぐらいでできちゃうというのは、やっぱり下からの力だけで伸びていったんじゃないかと、そういうものを必要とした全体のあり方というのがあつて、つまり、輸出産業を拡大しようという全体の政策の中に位置づけられたものとしてある。最近と同じ事実について、中林真幸君⁽³¹⁾のように効率的な資本主義が成立したと言つ意見もある。政策的な位置づけを強調した石井説は誤りだとするわけです。

片倉組に関しては、僕はある程度はそう言えると思つし、どうして片倉が集中的に生糸売込問屋や銀行の資金援助を受けることができたのかというと、それは片倉がほか比べて生産面で非常に優秀だったということがあるかもしれないけれども、それでもやっぱり金融の果たした独自の役割というのは消えないと思つんですね。その点で最近の若い研究者は、一番進んだものとしての製糸資本の姿を浮かび上がらせてはいるけれども、製糸業のそういう発展が社会全体の前近代的な構造をどういふふうに変えたかということに関しては、あんまり関心がないようですね。

田崎 産業革命史研究批判としては鐵道史の中村尚史⁽³²⁾さんと老川慶喜⁽³³⁾さんたちによる流通の方

(31) 中林真幸(一九六九年)

東京大学大学院/東京大学助手・千葉大学助教授・大阪大学助教授。『日本近現代經濟史專攻』、『取引制度の經濟史』(共著、東京大学出版会、二〇〇一年)、『近代資本主義の組織』(東京大学出版会、二〇〇三年)、『商品流通の近代史』(共著、日本經濟評論社、二〇〇三年)。

(32) 中村尚史(一九六六年)

九州大学大学院/東京大学助手・埼玉大学助教授・東京大学助教授。『日本近現代經濟史專攻』、『日本鐵道業の形成』(日本經濟評論社、一九九八年)、『工部省とその時代』(共著、山川出版社、二〇〇二年)、『商品流通の近代史』(編著、日本經濟評論社、二〇〇三年)。

(33) 老川慶喜(一九五〇年)

立教大学大学院/関東学院大学助教授・立教大学教授。『日本近現代經濟史專攻』、『埼玉の鐵道』(埼玉新聞社、一九八二年)、『明治期地方鐵道史研究』(日本經濟評論社、一九八三年)、『産業革命期の地域交通と輸送』(日本經濟評論社、一九九二年)、『鐵道』(東京堂出版、一九九六年)。

からの批判というものもあると思うんですけども、そういったものについてはどうなんでしょうか。抜本的に日本産業革命研究の枠組みというのを大きく超えているというふうに思われるんでしょうか。

石井 それは藤田貞一郎さん⁽³⁴⁾からの批判に関連してというと、やっぱり産業革命史の研究では、主要な産業に即して日本の産業資本がどのようにできたかというのを明らかにしているが、その中に生きている人間がどういふような生活をしたか、生産されたものがどういふ形で消費者に渡って、消費者の生活を支えたかということについては明らかにしてないんですよ。賃金労働者のことが書いてあるが、賃金労働者がどうやって、もらったお金で飯を食っていたのかということがわかってないじゃないかという、藤田さんの批判がそうなんですけれども、民衆の生活を明らかにするのは、産業資本の形成の研究から、直接には出てこない。その辺に私たちに対する批判もあったと思います。産業金融史の研究のあと、商品流通史の研究を立ち上げますね。これは参加メンバーによっていろいろ思惑が違ってますけど、僕はそこで国内市場論をやるうと思ってるんです。一九七四年に商品流通史研究会を作って、一〇年間ぐらいかかって『近代日本の商品流通』(共編、東京大学出版会、一九八六年)をまとめたんです。それと彼らがやってる民衆史とか交通史の研究っていうのは内容が違いますが、同じような問題意識を持っていたと思いますし、あの意味では古い産業史に対する批判でもあると思っています。

田崎 それでまた先に戻って申しわけないんですけども、中村政則先生が山田盛太郎先生の思いつきを聞いたときに、もし、日本が産業革命を完成、成立させなかつたら、日本はどういうふうになっていたかと思いませんかという質問に対して、きつとフィリピンのようになっていただろうねとおっしゃったという話をお聞きして、どのようにそういうことを考えればいんだらうと思つた時期があるんですが、そのときには石井先生は席を一緒にされていなかったんでしょうか。

石井 一つの話ですか。山田先生をお呼びした時の研究会ですか。

(34) 藤田貞一郎(一九三四年)

大阪大学大学院/松山商科大学助教授・同志社大学教授。日本近現代経済史専攻。『近世経済思想の研究』(吉川弘文館、一九六六年)・『近代日本同業史組合史論』(清文堂出版、一九九五年)・『国益思想の系譜と展開』(清文堂出版、一九九八年)・『近代日本経済史研究の新視角』(清文堂出版、二〇〇三年)。

田崎 山田先生をお呼びして聞いた時のことです。

石井 フィリピンというのは覚えてませんけどね、日本が違った形になったっていうようなそう言われた記憶はかすかにあります。

田崎 それはアメリカ従属というような、そういったレベルなのか。それともフィリピンの場合は大農場制、それこそ武力を持った人たちがそれぞれ農場を経営して割拠しているような状況なんですけれども、それと果たして産業革命を達成できなかった日本が一緒になるみたいな、同じようになるというのは僕のイメージとしてはないわけですけども、それをあえて山田盛太郎先生が言い、中村政則先生がそれに対して含蓄深い話であったというふうに思ったということに対して、これもいつか聞いてみなければならぬと思ったんですけどね。

石井 うん、なるほどね。その話を聞いたときはまだ一九六五年ですからね。アジアの中でフィリピンがちょっと落ちこぼれてきている最近の状況というのは、まだはつきりしてないんですけどね。アジアNIEsが出てきている状況は始まってはいるんだけど、フィリピンについてどういう意味合いで山田先生が言われたか私はちょっとわかりませんね。ただ、フィリピンというのは農地改革をマッカーサーがやって失敗してますからね。それが現在まで尾を引いているから、そういうことで農地改革のことに関連しての御意見だったのかもしれない。

三 イギリス留学と幕末維新期研究の新視点提示

田崎 先生の研究の中で一大転機になりましたイギリス留学ですね、その中で大塚久雄先生や大塚史学に対して新たな思いを強くしたという話をお伺いしたこともあるんですけども、具体的にはどのようなことが大きな大塚史学に対する批判というか、違った目を持つ契機になったんでしょうか。

石井 これも初めから計画的にやったわけじゃなくて、イギリスのケンブリッジ大学へ行ったと

きは、実は産業革命の研究の延長上で、日本帝国主義の問題を考えるために、当時の外国資本の勉強をやりたいと思っていました。テーマは二〇世紀初めのイギリス資本のことにして、それを帝国主義時代の日本の現実に照らし合わせると、二〇世紀初頭の東アジアの状況がわかるんじゃないかと考えていました。これは私の家内も同じような考えでして、私とともに、二〇世紀初めぐらいの資料を読もうとしたところが、実は資料が一九世紀いっぱいしかないことがわかったんです。それで予定を変更して産業革命期研究から幕末維新时期研究に戻ったわけです。ケンブリッジ大学のジャーディン・マセソン商会文書の整理がまだ十分にできていなかったのですが、横浜支店の担当者によって記された毎月のレポートがあることが判明し、文書整理の担当者が特別に未整理文書を見せてくれました。そんなことも幸いして、幕末の開港から明治二〇年ごろまで、日本の産業革命が始まる前の時期に横浜にやってきた、あるいは、神戸や長崎で活動していた外国商館、それを具体的に調べることができました。その結果は僕にとっては非常に新鮮な驚きの連続でした。本来の研究課題との関係でいうと、イギリス商人というのは、どれだけ見事な合理的な活動していたのかということで見ようと思っていたんですけれども、帳簿の正確さに関しては執念を持っていまして、一ヶ月ぐらいたった後で、僅か数セントの訂正を行っているんです。しかし、そういう形式的な合理性の中でやられている実際の仕事というところ、相当のごまかしがやっぱりあるんです。例えば、ジャーディン・マセソン商会の長崎支店で担当している商売を香港本店や上海支店との間で行っている。そこで物すごい利益を出しているんだけど、長崎での相手の高島炭鉱の所有者である後藤家二郎に対しては一種の背任行為に当るだらめなことをやっている。帳簿を両方見るとわかるんですけれども、相当あくどいことをやっていることがわかってきました。その研究を本にした『近代日本とイギリス資本』が出る少し前に、幕末の世界市場に関するシンボジウムの記録が『世界市場と幕末開港』として出ました。あのシンボジウムするとき(85)に関口尚志さんが、私のそういう議論に対して、イギリス商人は基本的に合理的に忠実に顧客に

(35) 関口尚志(一九三二年)

東京大学大学院/東京大学教授・横浜国立大学教授・フェリス学院大学教授。西洋経済史専攻。『世界市場と幕末開港』(共著、東京大学出版会、一九八二年)、『欧米経済史』(共著、放送大学教育振興会、一九八七年)、『中産層文化と近代』(編著、日本経済評論社、一九九九年)。

対して対応していたのであるが、それが日本にやってきてそういうようなことをやっているのは、日本とか中国とかそういう前近代的なところにどっぷり浸っちゃった結果そうだったのだ。本来イギリスでは、そういうことはありえないとおっしゃるんですね。私はそうじゃなくて、スコットランドですから、イギリスに属するところですから、どんどんそこから商人が出てきて活躍するときに、彼らはイギリス商人としての本質を維持しながら、アジアで、帳面の上ではきちっとした合理的な形をとりながら、相手を欺いたり、詐欺に近いことをやっていると理解したいと述べました。これはイギリス商人の本質にかかわる問題だと思う。それがよくわかるようになったのは最近になってからで、関口さんの言うようなイギリス商人は大塚さんが史実の一部を切り取って、大塚さんなりに見事に構成したイメージに過ぎない。実際のイギリス商人というのは、世界市場では、フライデーみたいなのをいっぱいつくっているような、そういう存在なんだというふうに見直す必要があると思うんです。

田崎 その一方で、日本がどうして明治維新を成し遂げられたのか。いわゆる対外的に自立ないし自律し得たのかという議論については、官僚が偉かったんだという権力的対応ですね。そういった視角と、それから服部之総さんが代表だと思っただけですけども、いかに民衆が、その後の世界市場に対抗し得るといったものを築いていったのかという、それは生産も含めてですね。そういった民衆の対応という二つの明治維新像というのがあったわけですけども、そこで、先生が「商人的対応」という新しい歴史像というか明治維新を理解する枠組を提起されたわけですね。それは近年言われているナショナリズムの議論とどのように絡み合っているのかということと、権力的対応、民衆的対応とどのような形でそういったものをとらえていくべきなのかということを考えていらっしゃるのか、そういったことをお聞きしたいと思います。

石井 それは研究史の流れからいうと、既に井上清さん⁽³⁶⁾なんかの研究がナショナリズムへの関心の強さを代表していますね。大石嘉一郎さんの場合は豪農論という形で、いわゆる民衆一般と違

(36) 井上 清(一九一三年～二〇〇一年)

東京大学/維新史料編纂局職員・皇室制度史編纂室々員・京都大学教授。日本近代史専攻。『日本現代史 明治維新』(東京大学出版会、一九五一年)、『条約改正』(岩波書店、一九五五年)、『日本の歴史』(上中下、岩波書店、一九六三～一九六五年)、『日本帝国主義の形成』(岩波書店、二〇〇一年)、『井上清史論集』(全四巻、岩波書店、二〇〇三年～二〇〇四年)。

つたレベルでの、しかし、佐々木潤之介⁽³⁷⁾さんが言われるような体制化した豪農じゃないような、小豪農を重視するわけで、その層がどう動くかということが実際の日本のナシヨナリズムを考える上では非常に重要なことになるんですね。

私は横浜からこの話を見ていまして、横浜では外商とのせめぎ合いという点では日本の商人が非常にながらばっているわけですよ。いわゆる草奔の豪農も大事なんだろうけれども、横浜に出てきて活動している商人が対外的には自立を支えているんじゃないかと思えます。これはどういふ商人かという、生糸売込商の場合は在郷商人もいますけど、輸入品の扱いでは引取商がいる。

彼らの多くは、江戸の商人、大阪の商人などで、大塚史学流の伝統的な理解からいうと、民衆的な商人活動によって破綻しかけてきた都市の特権商人です。これが外国との関係では、いわば民族的役割を与えられて、彼らが開港場に出てこないと外商の力に対応できないので、幕府も出て行くよう勧めますし、そういう売込商や引取商の仕組みができてきて、それによって外国資本の国内への侵入が制御されたという現実があるわけです。そういう意味でいうと、ナシヨナリズム論というのは一種の中間層の評価が必要なんですけど、豪農や内部だけでいうと退嬰的な存在になりかけていた商人層が、対外的な問題が入ることによって新しい存在理由を獲得して活躍する。それが江戸時代的な幕藩体制を中心とした流通システムとこのを再編成する。現代的な日本の商品流通は、非常に多段階の流通だとされますけれども、そういうものを生み出した前提としても幕末の商人的対応を考える必要があるんじゃないかなと思います。

田崎 ある意味で現代の日本の多国籍企業化と産業空洞化ですね、そういった問題に対していかに日本が今後あるべきかというような示唆を与えてくれるような視点だと思っただんですが、そういった現代的な問題というか、現代の日本からも企業がどんどん日本から出て行ってしまふ。もう国籍を持たない企業家が日本に生まれてくるというような問題意識から商人的対応論が出てきたわけではないのですか。

(37) 佐々木潤之介(一九二九年～二〇〇四年)

東京大学大学院／一橋大学教授・早稲田大学教授。日本近世史専攻。『幕藩権力の基礎構造』(御茶の水書房、一九六四年)・『幕末社会論』(塙書房、一九六九年)・『世直し』(岩波書店、一九七九年)・『近世民衆史の再構成』(校倉書房、一九八四年)・『幕藩制国家論』二卷(東京大学出版会、一九八四年)・『幕末社会の展開』(岩波書店、一九九三年)。

石井 違いますね。一九九〇年代にならないと、そういう問題は、日本では具体化しないんじゃないかと思えますね。むしろ私がそこで考えたのは、逆に外資が入ってくるかどうかということでしたから、日本資本が出ていくかどうかについては余り考えてなかったですね。外資を排除して資本主義化を達成するというコースをその後もたどったという問題が、実は日本産業革命でもかなり大きな問題であるということは、今度の『日本の産業革命』を書いた一九九七年の時点でも意識していました。そうした意識はありましたけれども、日本から出ていくことによって空洞化が進むというのは、まだ八〇年代には考えてはいませんでした。

田崎 というのは中国がなぜ半植民地化され、インドが植民地化され、日本は自立したかと言った服部之総さんの設問ですね。あの有名な問いかけの中で、日本商人、すなわち商人的対応を図れるような日本商人と、それこそ西欧の資本主義の手先になっているような中国の買弁商人ですね。そういったものも念頭に置かれながら研究をつくり立てていったのかということもあって、すなわち自分がかげれば、もう国籍も何も関係ない、もう自分の国がどうなるうと関係ないというような商人でも、それらは明らかに経済的な活動をしているわけですからね。その一方でナショナリズムを持った商人が出てくる。それは、これからの日本にとっても重要な問題というものを提起されているのではないのでしょうか。

中国史研究の中では必ずしも買弁商人というふうに言われるような、そんな卑怯な商人ばかりではないんだというような見解もあるわけですが。

石井 ええ、そうです。最近では、むしろ反動で逆に買弁は決して民族的に悪い商人ではないということ強調する状況になってきていますけどね。その商人がどうなるかということは非常に、あなたが言うように大事な問題で、単純に商人的対応というだけでは話にはならないと思いますね。商人だけじゃなくて、生産者の状況であるとか、それこそ権力のあり方とかが関連してくると思います。そういう点で言うと権力の場合は非常に明瞭で、外国人を排除すべしと言っている

人が実際にいるわけですからね。特に長州藩系の人たちは非常に外国人なり外国資本に対しては敏感に対応しています。薩摩の方が、外国人なんて大したことないっていうんで、外資導入に賛成したことがあるでしょ。そういう差があるわけで、明治政府の主流がやっぱり長州系ですから、外資を排除していくことになっていきますよね。そういう権力のあり方も商人の対応に大きく影響していると思います。そこは、これから商人的対応を考えていく上では重要な問題です。

四 日本商業史・日本金融史・経済史と情報史

田崎 そういった研究を深める中で、先生のご研究は商業史、金融史、それから情報史というような形で広がっていくわけですが、それをどのようにご自身の中で統一されているのでしょうか。日本経済史研究、本来、経済史研究の中にはそれらすべてが入っていたわけですから、途中で何かが抜け、それが独立した学問になっていくというような状況を、先生がまたもう一度統合されようとしているというふうに思うわけですが。

石井 そうですね。私はさつき山田先生の『分析』をどう読むかということで、全体構造の把握をしなきゃいけないと言いましたけど、これは山田先生が非常に古くから言っていたことで、『分析』の中にもありますけれども、把握は構造的じゃなきゃいけないとか、段階的に把握しなきゃいけないということは前からおっしゃってるわけで、私もそうだと思っています。

だから、どういう形で出すとよいかと言われると困るんですけど、私はこれからの課題としては、日本の近代とは何であったかということ全体としてつかむ必要があるというふうに思っているんです。全体像の問題もありますが、同時に、第二次大戦までの戦前の日本資本主義と戦後の日本資本主義というのが乖離してバラバラにとらえられていると思います。大石先生には非常に強いそうした傾向があると思うんです。ある時、中村政則さんが大石さんに戦前のことをやるのが戦後の分析をやる上でどういうふうに役に立つんですかと聞いたんですよ。そのときに



田崎 公司 氏

大石さんは、いや、戦前のことをやったから現代のことがわかるんじゃない、そこには構造的な断絶があるんだということを言われて、中村さんは、がっくり来たそうです。ある意味では大石さんは、戦前と戦後を構造的断絶だとして切り過ぎてしまったと思います。切れる部分は確かに大きくあるんだけど、よくよく見てみると切れてない部分もあって、そのために現在困っていることがいっぱいあるわけですね。

經濟史でいうと例えば産業金融、結局、間接金融の優位という一貫した問題があるんです。戦前の繊維産業においては固定資本があまり多くなくてすむので、銀行からの融資があれば、何とかやっていけるということで、間接金融に支えられて日本の産業は発展したという結論で終わっているんです。

戦後の復興も高度成長も間接金融に依存している。一九八〇年代に個人の金持ちが少し増えて、個人投資家が増えてきたんですけども、バブルの崩壊でみんな資本市場から逃げちゃって、今は莫大な個人金融資産が銀行に預けられたままで動いてないわけですね。それをどうやって資本市場を通してベンチャー企業なんかの発展に協力するような資金の流れを作るかが課題となっている。これは戦前以来の資本市場の未熟な特徴が存続していることを意味している。逆に言うと間接金融が余りにも強力であったために、銀行にお金が集まって、そこを中心に金が流れるということが常態化している。銀行がバブルでもうだめになってオーバーバンキングの状態になった中で、本来、流れるべき資本市場にお金流れない。そういう問題が今日あるというのは、戦前の体質を引きずっているからなんです。

官僚制の問題についても、やっぱりある程度連続面があると思うんです。戦前戦後を通して中央官僚が優位であるという状態が続いているわけで、それを前提にした政治の世界というのは中央に集中した財政資金をどうするかということに関心を集中する。これもやっぱり戦前戦後に一貫した問題としてとらえられる。そういうことを考えると戦前と戦後の経済について、もう一

度断絶を含みながらも全体として一貫した特徴のある近代日本の資本主義像を把握し直す必要があるんじゃないかと思えますね。その問題は、これからの若い世代の研究者にぜひやってもらいたいと思っています。

五 日本帝国主義史研究と戦間期金融史研究

田崎 それと同時に明治維新史研究から戦間期金融史研究という幅のある、あらゆる時代に目くばせした研究をお続けになつていらつしやるわけですけれども、自分の焦点はここであるというようなものというのはあるのか。それとも、そうではなくて、行きつ戻りつする中で自分の研究というものの位置づけがあるというふうに思つてらつしやるのでしょうか。

石井 そうですね、私の考えではやっぱり近代史全体を明らかにしたいという気持ちの方が強いですけれども、今の関心は近代の出発点のところに集中しています。最近では近代自体を近世の延長上で理解できちゃうと見るような傾向が強くなっていると思つてますよ。これは速水融⁽³⁸⁾さんが言われている経済社会論もそうですし、それに便乗する形で網野善彦⁽³⁹⁾さんもそういうことを言いますしね。先ほどのフィリピンじゃないけど、日本でなぜ明治維新が起こり得たのかということとを明らかにするためには、やっぱり徳川幕藩体制が持っていた特徴が問題になるわけですよ。

ああいう体制がアジアでできてきたというのは確かにユニークなことであるから、それを説明しないといけないし、それから、近代化のある程度の部分は説明できると思えますけれども、近代化なんて楽々できちゃったというふうな最近の議論ですね、江戸時代が非常に発展してたというそういう議論に対しては、本当にそうかということをもう一回吟味しなければならぬ。幕末から明治の初年のあたりまで、これ、本格的には僕、日本国内についてははやったことがなかったんですけど、そこまで来ると断絶面がよく指摘されるわけで、そこを明らかにすることによって内容的に江戸時代から近代へ、どうつながっているのか、つながっていないのかを明らかにできる

(38) 速水 融(一九二九年)

慶應義塾大学大学院/日本常民文化研究所員・慶應義塾大学教授・国際日本文化研究所センター教授・麗澤大学教授。日本経済史・歴史人口学専攻。『日本における経済社会の展開』(慶応通信、一九七三年)・『計量経済史入門』(日本評論社、一九七五年)・『歴史人口学の世界』(岩波書店、一九九七年)・『歴史人口学で見た日本』(文藝春秋、二〇〇一年)。

(39) 網野善彦(一九二八年)二〇〇四年)

東京大学/日本常民文化研究所員・東京都立北園高校教諭・名古屋大学教授・神奈川県立短期大学教授・神奈川県立短期大学教授。『中世荘園の様相』(塙書房、一九六六年)・『無縁・公界・楽』(平凡社、一九七八年)・『日本中世の非農業民と天皇』(岩波書店、一九八四年)・『古文書返却の旅』(中央公論新社、一九九九年)・『日本の歴史 00巻』(『日本』とは何か) (講談社、二〇〇〇年)。

と思っているんです。今のところ近代の中で最初のところ集中して、そこにわからないところがあるのでやってるんですけども、最終的には現代まで行きたいと思っております。

田崎 もう六年前の話になるんですけども先生の東大経済学部の最終講義の中で、学問が常に政府のあり方を批判的に見る、それが重要なんだということ強調されていらつしやったと記憶します。これは、先ほどお尋ねするのを忘れてしまつたわけですけども、ちょうど日本産業革命研究の本格化のときに東大では大きな大学紛争というものがあるわけです。石井先生ご自身が安田講堂に学生を説得しに行かれたわけですよ。そういった経験が先生のご研究に問いかけたものというのは何だつたんでしょうか。同時に、あのときには総長が経済学部出身の大河内一

男先生⁽⁴⁰⁾だつたのが、もうやり切れなくて加藤一郎代⁽⁴¹⁾行になり、文学部の方では西洋史担当で文学部長⁽⁴²⁾だつた林健太郎先生が、それこそ上げるし上げて遭うといった時代状況の中で研究を進めていく。そういった中で東大紛争といったものが先生のご研究について何か、やはり物事を批判的に見るという方は変ですけども、常に関心の目を持って世の中のある方というものを見ていかなくちやならないと。それを失つたならば、もう曲学阿世じゃないですけども権力におもねるものになっていく。そういった歴史学が今は横行しているとは思うんですけども。

石井 安田常雄君⁽⁴³⁾や橋本寿朗君⁽⁴⁴⁾、これは全共闘の方ですけど、彼らと議論していて、なるほどなと思つたのは、やっぱり学問のあり方として、いわゆる広い意味の近代主義的な歴史、あれなんか一種の啓蒙的な性格があり、やっぱり建前で、こうでなきゃならないということは言つただけど、大衆、民衆っていうのは、そういうきれいな事言われても動かないということですね。もつとどろどろした人間関係の中で動いているからね。そういう人に向かつて、ヨーロッパではこうですとかアメリカではこうですよなんてモデルを示しても全然受け入れられない。それをどうするかっていうことを、学問の世界の中で真面目に語るしかない。その問題は、僕の中に、今でも残つてましてね。自分がやることがちよつとお説教的な話に終わつてるんじゃないかっていう

(40) 大河内一男(一九〇五年～一九八四年)

東京大学/東京大学教授。社会政策理論専攻。『独逸社会政策思想史』(日本評論社、一九三六年)、『戦後労働組合の実態』(日本評論社、一九五〇年)、『黎明期の日本労働運動』(岩波書店、一九五二年)、『戦後日本の労働運動』(岩波書店、一九五五年)、『暗い谷間の労働運動』(岩波書店、一九七〇年)。

(41) 加藤一郎(一九二三年)

東京大学/東京大学教授・成城学園長。民法・農地法専攻。『不法行為』(有斐閣、一九六五年)、『民法における論理と利益衡量』(有斐閣、一九七四年)、『民法ノート』上(有斐閣、一九八四年)、『農業法』(有斐閣、一九八五年)。

(42) 林健太郎(一九一三年)

東京大学/東京大学教授・参議院議員。ドイツ近代史・歴史哲学専攻。『独逸近世史研究』(近藤書店、一九四三年)、『現代社会主義の再検討』(中央公論社、一九五八年)、『ワイマル共和国』(中央公論社、一九六三年)、『ドイツ史論集』(中央公論社、一九七六年)、『歴史からの警告』(中央公論社、一九九五年)。

(43) 安田常雄(一九四六年)

東京大学大学院/鹿児島大学助教授・東京電気通信大学教授・国立歴史民俗博物館教授。日本近現代社会思想史。『日本ファシズムと民衆運動』(れんが書房新社、一九七九年)、『戦後体験の発掘』(編著、三省堂、一九九一年)、『近代社会を生きる』

反省はありますし、僕の研究っていうのは、やっぱり現実世界の中に内在しているわけだから、その中にあるものをどういふふうに理解して、どう動かせるかということを考えなければならぬ。私の研究の原点から言つと、近代的な人間というものも、それは抽象的過ぎて、もつと考え直さなきゃいけない問題だということ。これは何て言つたらいいかな、いわば近代的な人間についての理解、あるいは、キリスト教的な人間理解に関連する問題だといふふうに思っているんです。そこには一種の問題性があるわけで、やっぱり人間、孤立しては生きられないわけだけど、非常に強い自立した個人のプロテスタントになるうとしてるわけですよ。特に強い個人をめざす無教会派プロテスタントの場合には、例えば内村鑑三先生⁽⁴⁵⁾についていきますという具合で、内村先生への帰依みたいになつちゃつて、やはり一つの現実の集団の中で安心するということになるわけです。集団の中で生きるんだつたら個人で生きるよりもはるかに安心ですから、お互いにその中に埋没しちゃうわけです。ですから、そういう意味でいうと、一人では生きられない人間がどうやって生きていくかについていうことを考えるときに、大塚先生流に言つと、共同体的な関係が私たちを取り囲んでおり、それに属するという面が圧倒的にあるわけで、それじゃいけませんよということと言っただけではやっぱりだめだと。じゃあ、どうしたらいいのかつていふとなかなか難しいですけどね。あなたなんかいるんな人々と一緒にやつてるからわかるでしょう。どういふふうに人間が変わり得るかということをね、やっぱり解き明かさないと、学問や思想は本当の力にならない。大衆を動かす力にならない。そういう問題を大学紛争は研究者に対しては問いかけたと思います。

田崎 そのときに信仰上の問題で先生は教会を離れるという大きな転機というのがあったわけですよ。それについては、もう毅然として、そういう行動がとれたんですか。それとも、やはり後ろ髪引かれるような思いはあったんでしょうか。

石井 現実には、さっき言った大きな集団の中に、偉い先生の下に皆さん、寄り添う形で安心し

(編著、吉川弘文館、二〇〇三年)・『戦後体験を生きる』(編著、吉川弘文館、二〇〇三年)。

(44) 橋本寿朗(一九四七年)二〇〇二年)

東京大学大学院/東京電気通信大学教授・法政大学教授・東京大学教授。『日本近現代経済・経営史』・『大恐慌期の日本資本主義』(東京大学出版会、一九八四年)・『日本経済論』(ミネルヴァ書房、一九九一年)・『戦後の日本経済』(岩波書店、一九九五年)・『戦後日本経済の成長構造』(有斐閣、二〇〇一年)。

(45) 内村鑑三(一八六一年)一九三〇年)

札幌農学校(現、北海道大学)・アマースト大学/第一高等中学校(現、東京大学)教員・泰西学館現、大阪商業大学教員他。無協会派キリスト教伝道者。山本泰次郎編『内村鑑三日記書簡全集』(全八巻、東京教文館、一九六四)一九六五年)・内村鑑三全集(全四〇巻、岩波書店、一九八一年)一九八四年)。

て生きているわけです。指導者はいつも偉いというわけですから、その先生の言っていることがすべてになるのですね。ところが、本来は、プロテスタントの教会っていうのは万人祭司論ですから、すべての人が祭司であるんだというふうな考え方からすれば、そういうキリスト教会のあり方っていうのは現実にはカトリックの世界に戻っちゃうことになるんですよ。私たちは、本当はそれぞれが自立しなきゃいけない。もちろん仲間と一緒に。じゃあ、どういう集団がくれるんだらうかというのは具体的にはまだ分らないですね。ただ、僕は一人でも平気だと思っているけど、平気だと思っているのは本当かいなと言われると、本当はそうじゃないかもしれないというふうにも思うし、その辺のところは人間としてどういうものとしてあり得るのか、またそうあり得たとして、それが日本の政治なり世界をどう変えていくことになるのかということもこれらも考えていきたいと思っています。

田崎 少しやわらかい話で、院生の時期にはもう生涯のパートナーである石井摩耶子先生と出会うれていらっしやるわけですね。

石井 ええ、その時期というのは共同研究はまだですね。家内が私の国内での調査と一緒に رفتてくれて、大分資料なんか筆写してもらったりなんかしてますけれども。

田崎 イギリス産業史というかイギリス経済史研究、そういったものと切磋琢磨されるみたいな理想的な関係というのは、もうこのときから生まれていたと思つてよろしいですか。

石井 いいえ、まだそこまでは行つてませんね。お互いに違つことやつてるなと思ひながら仕事をしています、似たことをやり始めたのは一九七七年にイギリスへ留学して、同じ資料を別の角度から見ながら中国・日本とイギリスとの関係史を、それぞれが勉強するようになってから、やつと学問的会話が本格的にかみ合うようになったのです。

(46) 石井摩耶子(一九三九年)

東京大学大学院/独協大学教授・恵泉女学院大学教授。国際関係論専攻。フィリス・デーン著『イギリス産業革命分析』(翻訳、社会思想社、一九七三年)、『発展途上国の政治経済学』(編著、東京書籍、一九八七年)・クリストファー・ベイリ編『イギリス歴史地図』(翻訳、東京書籍、一九九四年)・『近代中国とイギリス資本』(東京大学出版会、一九九八年)。

六 全体史・通史の執筆

田崎 一九七六年に日本経済史のテキストをまとめられ、そして九一年にその二版を出版され、そして昨年に『日本流通史』という全体史、通史の執筆をされているわけですね。藤田貞一郎さんの『近代日本経済史研究の新視角』の書評会でもそうですけども、部分的な批判というところのいろいろあり、これは中村政則先生がよくおっしゃることなんですけれども、体系には体系でもって応えなければならぬ。すなわち部分的にこれが足りない、あれが足りないといった言い方はたやすいかもしれないけれども、それでは全体史、通史の中で自分がどのような一貫した議論ができるのかといった問いかけというのがあると思うんです。そういった中で今、孤立分散的というかタコつぼ状況のような研究状況がすごく進んで、なおかつ院生レベルですと、「先生、あいてる研究史のすき間はどこですか。どこをやれば論文書けますか。注目されますか。」みたいな、そういったことを平気で質問するような状況があるようですが、そういったことについてはどのようなお考えをお持ちでしょうか。

石井 今の大学院生はテーマを選ぶのも大変だと思えますよ。つまり、研究がずっと蓄積されてきていますからね。それを抜くためには、まず最初にその研究史をマスターしなきゃいけない。マスターした上でよく見ると、もうほとんどやられちゃって、全部やられてるからテーマのたてようがない、ということになりかねないし、一生懸命探した結果残っていると分つたものは実に些末な問題であった場合、そこをテーマとして選ぶっていうことはできないでしょ。それに、何だかんだいっても新しい資料を使わなきゃいけないということ、なかなか一挙に全体の理解を変えようなテーマに出会うことも少ないし、新しい資料を見つけるのも難しい状況だと私は同情的なんです。ただ、それは逆に言えば、もうかなり蓄積があるから、その上に乗っかって新しい議論ができるわけで、その意味では昔の人よりもはるかに快く議論ができる状況にあるわけだから、それはプラス、マイナス両方あると思うんですね。ですから、研究するときには視野とし

ては、できるだけ広く全体を見ながらやらなきゃいけないし、やれると思うんですけども、同時に個別のテーマを実証するときは、できる限りテーマを限定し、深く掘り下げることにしかないだろうと思います。

私自身の経験から言っても、最初はやっぱり手探りですよ。実証していて、わかんないことがいっぱいあってやっているときにね、あるところではずっと全体が開けてくるっていうことがありますが、絶えず自分の個別の研究をやりながら、いつも、その時代の全体像なり何なりっていうことを、あるいは、研究の意味ということを決えず考えながら自分の実証をやっていくと、あるところで、「あっ、こういう新しい見方ができそうだな」というのが出てくる場合があるんですね。私は、例えば『近代日本とイギリス資本』の中で、「商人的対応論」なんて言いましたけど、実際に商人的対応論というテーマで研究をまとめて理論化しようと思ったのは本を書いた最後の段階ですよ。それから『日本蚕糸業史分析』は、「重層的階級構造論」としてまとめたんですけれども、あの言葉も分析内容を総括してできたのはやっぱり最終段階ですね。本をつくる最後の段階で、そういうことになっていたかなということだね。突っ込んでいって全体としてまとめると、そういうイメージだというふうだね。ですから、あんまり初めからこういうことをやるうなんて考えないで、やっぱりさっき言ったように、小さなテーマでもいいから選んでやっていて、それが今度は全体に対してどういう問いかけができるのかなということを反省してみると、今までの研究水準を頭一つだけ抜くようなことを何か言えるということが多いと思います。ということ、私の経歴はそういう意味では絶えず試行錯誤で、こたごたしながら、まとめてみることを繰り返しているものであって、そういうことを本当に初めから考えてたわけじゃないと思いますね。そういう意味では、通史を書いたことは私にとっては視野を広げる上では非常に役に立ちました。これは授業でやってるわけです。やりながら自分なりの通史を考え、いろんな新しい発見もできるんですね。

田崎 その上でですけども、一九九九年の歴研大会のときの戦後の歴史学の再検討の中では、発展段階論をもう一度踏まえて何が言えるのかというような話をされていらっしやいました。その姿勢というかその視角というのは、これからも堅持しながら研究を続けて行かれるのですか。

石井 ええ、社会構成体の発展段階を考えよう、もう一回改めて考えてもいいんじゃないかというのを報告で言ったわけですが、あれは何としてでもマルクスの議論を守りたいと思ってるわけではなくて、とりあえずの仮説としてそういうものがあるから、それでどこまで行けるかを帰納的に考えてみたのです。あのときは岩波の新しい世界歴史の講座をほとんど全部読みましたよ。あれに載っている論文は最先端の業績で、しかもあっちこち向いてますからね、それぞれの論文を見ていくと、最近の研究は間違っているなと思うようなものもあるわけです。そういう意味で、やや独断的に自分の見方で判断したこともありですけども、それをやってみるとやっぱり大きなプロセスとしてはマルクスの発展段階論は余り間違っていないんじゃないかというふうに思いましたね。それから社会主義をどう見るかってことは、マルクスの生きていた当時は、実際には十分考えられてなかったし、二〇世紀の現実は違っちゃってるわけですから、社会主義という近代をどうやって超えられるかということについては、これからまだ議論が続くと思えますけど、この報告では多国籍資本の発展に対応して、それをコントロールしようという一種の世界政府論を述べたんですけどね。やっぱり政治の世界が遅れてますから、そこを何とかしなきゃいけないという展望で、社会主義は世界政府としてしか考えられないというふうに書きました。

ただ、歴史を段階的に見るということとは、僕は基本的には人間の解放という点から見て、直接生産者のあり方が時代とともに自由・平等を目指して進化しているというふうに言えると思いませんけれども、同時に戦争の歴史を見ると、時代とともに殺し合いが激しくなっているわけですね。ですから、そういう意味では生産力で歴史は進歩しているように見えるけれども、同時にますます危険なものをつくって人間破壊と自然破壊をしているという意味では、生産力イコール

破壊力でもあると。そういう危ないものとしても人間の技術を考えなきゃいけないということも言ったんです。この点はあの報告を作っていく中で、おのずと浮かんできたアイデアで、自分自身びっくりしましたけどね。この生産力「破壊力」という私の見方については、網野善彦さんが『日本の歴史00巻「日本」とは何か』のなかで取り上げて評価してくれました。もっとも、網野さんの場合にはもう歴史の段階なんてないんだってという話になっちゃうから、そうなったら歴史の流れ自体もわかんなくなっちゃうと思うんですけど。

楽天的に世の中が一直線に進歩するなど言っちゃういかんよというのは、それはそのとおりだと思っています。ただ、にもかかわらず、今日の世界はある段階にまで来ちゃってるので、そこで直面する問題をどういふふうにこれから乗り越えていけるのか、中世にまさか戻るわけにいかないの、やっぱり近代の達成点をもとにして、それを乗り越えながら新しい人間社会をつくるかっていうことに話を持っていくしかないと思っています。

ですから、例えば、大塚さんなんかは、自立した近代的個人が小生産者の発展を通じて典型的な近代社会をつくったというのには自分の最大の主張であるが、その正しさは証明できた、現実が証明してくれたって言っています。何を言ってるかという、近代社会を作らないと、その上に立った新しい社会をつくれぬ。だから、近代の生産力とか、あるいは政治制度とか、そういうものを前提にしてそれを乗り越えるような社会主義社会っていうのは、そう簡単にはできないけど、やっぱり作らなきゃだめだということが二〇世紀の歴史は証明していると言っんです。これは大塚史学の主張が正しいことを実証した点として私も承認している点です。

僕は、さっきの講座派と労働派の話なんかに関連して言うと、人間社会というのはいろんな面を持っていきますから、どうやったら近代を乗り越える社会を作れるかということでもまだわかってない部分があるわけですね。特に現代みたいに、ばらばらの個人が出てきて、それがどうやって失われた共同性を回復した社会にするかっていうことが、最大の問題としてあるわけ

すから、それが広い意味の社会主義ですね。どうやってそれができるかですよ。そういう問題をやっぱり考えていかなきゃいけないとすると、僕は講座派の問題意識へと回帰するしかない、と、ますます思っているんです。

大塚史学の場合には近代そのものに対する批判が不足しているという問題がありますけれども、言っていることの部分ではやっぱり正しい面が強まってきていると思うんです。労農派系の社会主義理論の方が元気がなくなったのは、かつては、もう近代になった以上、資本主義を乗り越えることが課題である、ソ連を見る中国を見るとか言って、二〇世紀の第一次世界大戦以降は世界史は社会主義への過渡期に入ったという、こういう議論をしていたためですよ。近代は比較的簡単に乗り越えられるという議論からすると、ソ連は、我々から見ると一種の事実信仰的な見方に過ぎませんが、社会主義そのものなんじゃないかという形で、かつて社会党がそうしたことを考えていました。ところが、そうした労農派的な、あるいは宇野派的な近代社会と社会主義の理解には、大きな限界があることが証明された僕は思っているんです。そこをどういふふうに新しい世界を展望する思考の中に取り込んでいくかが、大きな課題でしょう。

七 今後の日本経済史研究について

田崎 そういったことを踏まえて、今、本当にタコつぼ状況に陥っている日本経済史研究ですけれども、そういったところに関して、日本経済史研究が今後どうあるべきかというのはちょっと大きな話ですけれども、とりあえず我々の学生時代には大石嘉一郎先生、石井寛治先生という大きな大木があった。その大木を見ながら、自分はどこに位置すればいいのかというのが、ある意味では考えられた幸せな世代だったんです。もうそういった研究の基準というものが相対化される段階が近づく中で、どのようにこれからの歴史研究、日本経済史研究に限定してもいいと思っただけでも、進んでいくべきなのかというようなことが、やはり最後の課題といったもの

になってくると思います。

石井 ええ、多分今の若い人たちの考え方というのは、やはり新しい見方がいろいろ出てきているとは思ってますよね。ただ、そういうのを見て思うのは、アメリカで新しい見方が出たのでそれを学ぶというだけじゃなくて、それを消化しながら、一体それを使って何を明らかにするのかという問いかけがもっとなされるべきだと思うんです。それは自分自身に関する問いかけでもあるわけです。

何を明らかにするべきかっていうのは、研究史はこうだから、ここに解き明かすべき空白部分があるからこれをやるっていうだけじゃなくて、やっぱり今、自分がなぜそれをやるのかということが問われると思いますよね。僕なんかの問題意識で言ったら、やはり日本の中における近代天皇制や資本のルールなき活動に対する批判というものに行くわけですけれども、今の若い人たちも学者商売を選んで、一体何のために、こんなに苦労してやってるのかということを考えているだろうと思っんですよ。そうした問題意識のレベルの問題が、最初に僕はあると思っんです。研究史の中だけでもを考えるのではなく、現実との対応の中で、あるいは自分の生活の中で何がやりたいのかということをもっと正直に考えれば、そこから何か取り組むべきテーマが発見できるんじゃないかと思っんです。

田崎 それでは長時間にわたりましたありがとうございます。

私自身も、これからの日本經濟史研究の周縁研究を担う者として、石井先生のゼミ生だった者として一生懸命考えていきたいと思っんです。本当にどうもありがとうございます。

石井 ありがとうございます。

(以上は、二〇〇四年二月一七日の午後四時～六時に、大阪商業大学にて行われたインタビューの記録である。)

石井寛治先生のインタビューを終えて

石井寛治先生のインタビュー話が持ち上がったのは、昨年十一月中旬のことであった。瀧澤秀樹大阪商業大学比較地域研究所々長より、瀧澤先生の東京大学経済学部・大学院経済学研究科の先輩であり、私の指導教官でもあった石井先生とのインタビューを『大阪商業大学商業史博物館紀要』第五号に掲載するので、石井先生を大阪商業大学にお招きして、「日本経済史研究の回顧と展望」に関するインタビューを行うようにという指示が伝えられた。

実は私たち二人は、昨年六月に大阪・貝塚に史料調査にいらつした石井先生をお迎えし、大阪・梅田のうおまん分店で楽しい会食をしていたのだ。夕食の席で交わされた石井先生と瀧澤先生との重厚な学問の話や軽妙な芸術・文学に及ぶ話には終始圧倒されるとともに、久しぶりに知性の片鱗に触れ、得した気分になることができた。

幸運なことに、続いて石井先生が十二月初旬に大阪経済大学日本経済史研究所で同志社大学経営学部の藤田貞一郎さんの『近代日本経済史研究の新視角』の書評会にコメンテーターとして来阪されたこともあり、無理を承知でお願いしてみた。先生はすぐさま対談を承諾して

下さり、今回の企画が実現したのである。

ここで私事について述べることを許して頂きたい。

私にとって先生の中の先生と呼べる方を敢えて三人だけ挙げるとするならば、大石嘉一郎先生（東京大学名誉教授・明治学院大学名誉教授）と宮地正人先生（東京大学名誉教授・国立



石井寛治 『日本経済史』（東京大学出版会、1976年、〔第2版〕1991年）

田
崎
公
司

歴史民俗博物館長、そして石井寛治先生である。大石先生は同じ福島県出身者で、かつ私が美代子夫人の遠縁だと言うことで先生の三男坊の如く可愛がって頂き、宮地先生には明治維新研究のみならず、学会運営においても直属の部下として薫陶を受けることができた。石井先生は文字通り指導教官としての先生である。先生のゼミ生の中で一番出来の悪い私を先生はいつも気に掛けて下さり、かたじけなくも大阪にいらっしやる時は必ずご連絡を頂いていることも幸いしたのである。インタビューを終え、東京大学大学院経済学研究科の同窓生である中野安大阪商業大学商業史博物館々長や学芸担当池田治司・丸尾佳二のお二人を交えた会食で、また楽しいお話を伺うことができた。その席上、石井先生と東京都立日比谷高校・東京大学教養学部（駒場）で同級生だった、ある芥川賞作家の次の文章を思い出した。

「たとえば知性というものは、すこく自由でしなやかで、どこまでもどこまでものびやかに豊かに広がっていくもので、そしてとんだりはねたりぶざけたり突進したり立ち止まったり、でも結局はなにか大きな大きなやさしさみたいなもの、そしてそのやさしさを支える限りない強さみたいなものを目指していくものじゃないか、…ぼくたちを…相手に、『本当に夕べっているのは楽しいですね。』なんて言っているだけでも楽しそうに話し続けられるその素晴らしい先生を見ながら、ぼくは（すこく生意気みたいだが）ぼくのその考え方が正しいのだということを、なんていうかそれこそ目の前が明るくなるような思いで感じとったのだ。そして、それと同時にぼくがしみじみと感じたのは、

知性というものは、ただ自分だけではなく他の人たちをも自由にのびやかに豊かにするものだということだった。つまりその先生と話していると、このぼくまでそのちっちゃな精神の翼みたいなのをほんくりに一生懸命振上げてとびまわり出すような、そんな生き生きとした喜びがあったんだ。そしてそんな自由でのびやかな快感に酔うと同時に、ぼくはうんと勉強して頑張つて、いまにこの先生をワァーッと言わせてやるぞ、なんてえらく緊張してファイトを燃やしたりしちゃつて……」。

お気づきの方も多いであろう。一九五八年に『喪失』により中央公論新人賞を受賞し、一九六九年に前年からの東大紛争による入学試験中止に翻弄される名門・日比谷高校三年生の一日を描いた前述の作品により第六十一回芥川賞を受賞した庄司薫こと福田章二さんの『赤頭巾ちゃん気をつけて』（中公文庫、一九七三年、二九〇頁）である。ここで描かれている先生とは、福田さんの東京大学法学部の指導教官であり、日本政治思想史研究の泰斗・故丸山眞男先生である。私が中学生時代に夢中になって読んだ庄司薫こと福田章二さんと石井先生とが、高校・大学を通じての同級生であることに気づいてはいたが、先生にこの質問をぶつけたことはない。しかし庄司薫のこの文章が先生との会話の中で浮かんだということは、偶然ではないような気がする。私にとって石井先生は、他の誰よりも学問というものを真剣に考えさせて下さる恩師であった。怠惰な私は大学院在学中、武田晴人先生（東京大学大学院教授）や他の先生に顔を合わすたびに叱られてばかりであ

つたが、不思議なことに石井先生に叱られたのは、わずか二回だけである。

一度目は故橋本寿朗先生（東京大学名誉教授）から私の研究視角が大石先生そのものだと言われ、私が明快な反論をしなかった時であり、二度目は私の論文が大石先生の文章の引き写しだと石井先生が判断された時である。普段は温厚な先生が、静かだが厳しい口調で研究者としての心構えを諭された時は、ポロポロ涙が止まらなかった。曲りなりに学問の道を志し、研究者として今日あるのは、石井先生の熱心で誠実なご指導の賜物である。私は私なりに、「うんと勉強して頑張つて、いまに石井先生をワァーツと言わせてやるぞ、なんてえらく緊張してファイトを燃やした」時期もあったのである。また歴史学研究会準備会で当時院生であった谷本雅之さん（東京大学大学院助教）が「石井先生」と呼んだことに対して、「この研究会での参加者は同格です。先生の尊称は必要ない。」とたしなめられたことも忘れられない思い出である。

ここで本稿が掲載される雑誌が博物館紀要であることより、このままでは忘れ去られてしまうであろう石井先生に関するサブカルチャーの記録を掲げることが識者の皆様に許して頂きたい。【図版1】は、一九九〇年代に大ヒットした女性コミックである鈴木由美子『新・白鳥麗子でございます！』（1、講談社、一九九二年、一〇頁）であるが、これには石井先生の『日本経済史』のテキストが描かれている。この『白鳥麗子でございます！』シリーズは、鈴木保奈美・松雪泰子とい

著作権者によりweb上の図版掲載が規制されている為、ホームページでは当該図版を割愛いたします。

【図版1】

う人気女優により、二度テレビドラマ化されているが、その原作コミックに先生のテキストが登場しているのである。これは先生のテキストがいかに大学教育の中で広く活用されているという証左になるものである。続いて【図版2】は、別冊宝島322・河合塾編著『学問の鉄人 大学教授ランキング 文科系編』（宝島社、一九九七年、二八七頁）の経済史の項目での先生の位置づけである。これら二つの史料を掲載することに、批判を持たれる方が多いことは想像に難くないのであるが、敢えて私は、この対談の史料として掲げた。ご海容の程をお願いしたい。

最後に、この対談は限られた時間と限定されたテーマで行われたため、日本経済史研究を語る際に忘れてはいけない多くの研究者に言及することができなかった。この点も宜しくご理解を頂きたい。またインタビューで登場した研究者の履歴については、私の責任で簡単な経歴と業績とを掲げてみた。事実確認は学習院大学大学院の大内雅人さんのお手を煩わせた。今回のインタビューを実現するためにお力を頂いた瀧澤秀樹・中野安両先生、商業史博物館学芸担当の小田忠・池田治司・丸尾佳二の皆さん、何よりも石井寛治先生にお礼を申し上げます。

【経済史】 ●産業革命 ●近代化 ●市場経済化 ●数量経済史 ●比較史 ●文化・物産複合 ●プロト工業化

大学における歴史関係の講座の常で、時代や地域に分けて教えられていることが多い。日本経済史と西洋経済史という分け方が一般的だが、内容は千差万別。主として産業革命期以降を対象とするが、16世紀以降の世界経済を1つの世界システムとして理解する世界システム論登場以降、俄然面白みを増してきた。

	氏名	大学・学部	研究内容
重鎮	石井寛治 (1938)	東京大 経済学部 教授	近代日本、とくに幕末維新期の経済思想史研究。オックスフォード留学中にイギリスの原史料を縦横に駆使し、日本の近代経済史を本格的に分析した。近年は情報の経済史についての研究を手がける。
	藤瀬浩司 (1933)	愛知淑徳大 現代社会学部 教授	大学時代を戦後の社会的、経済的な変動の中で過ごし、経済学へ。20世紀の世界経済を動かした原動力を世界史の分野に踏み込む壮大なスケールで研究。国際金本位制、国際連盟についての研究がある。
中堅	秋元英一 (1943)	千葉大 法経学部 教授	ヨーロッパ中心の経済史研究にあって、アメリカを対象に新しい方法や史実を探る。現代アメリカ経済にとってのNAFTAの意味と各地域への影響などを研究。アメリカ経済史の概説の著作もある。
	老川慶喜 (1950)	立教大 経済学部 教授	日本経済史を、制度史や構造史ではなく、交通・運輸・消費といった独自の分野から分析、研究している。とくに日本の鉄道史を商品流通という視点から捉えた研究で成果をあげた。
	岡崎哲二 (1958)	東京大 経済学部 助教授	現在論壇に上っている1940年体制論の原点を提示。着眼点に優れ、まさに経済史の新しい研究分野の開拓者。今後学界に及ぼす影響はますます増大するだろう。
	川勝平太 (1948)	早稲田大 政治経済学部 教授	現在学際的に注目される、日本をアジアや世界の文脈の中で捉える議論の火付け役のひとり。経済史に文化史的な視点を取り入れ、「物産文化複合」という概念を提唱する。
	武田晴人 (1949)	東京大 経済学部 教授	日本の資本主義の発展を、鉱山業や持株会社としての財閥本社の検討などにより解明。現在は談合・系列・協調などの日本的経済システムを歴史的に研究する。手堅く良質の研究を積み重ねている。
	廣田功 (1944)	東京大 経済学部 教授	フランスの経済社会の発展を、ヴァカンス、消費など日常生活の特徴と関連づけて解明。関心は、ヨーロッパ統合への歩みについて第一次大戦以後から多角的に研究すること。
	山本有造 (1940)	京都大 人文科学研究科 助教授	厳密な数量データの操作に基づく数量経済史研究。国際収支、国民所得、生産指標などの概念と統計を歴史分析に応用し、主に日本の旧植民地圏のマクロ的経済構造を考える。

【図版2】